わからせ
委員会
虐
あの自称最強女
時間停止でわからせ
私は
負けました

校庭に人だかりができている。
その中心には、一人佇む女生徒と、呻きながら地面に
横たわる数人の男たち。
「これに懲りたら、今後うちの学校の生徒に手を出そうと
思わないことね」
彼女の名は清水紗希(しみずさき)。
「この私にケンカを売るとか、頭悪すぎ」
自称最強女だが、実際に彼女に敵(かな)うものは
この地域一帯には存在しておらず、
近隣の素行の悪い連中で彼女を知らない者はいない。

何かトラブルがあるとその腕で黙らせてきた事に加え、
容姿やプロポーションの良さから、当校の生徒には
男女問わず皆に好かれている。

今回はうちの学校の女生徒にしつこく絡んでいた
半グレかぶれの他校生を懲(こ)らしめたらしい。
「さすが紗希ちゃん！」
「清水さんのおかげで助かったよー」
「5人相手でも余裕とか…すごいねぇ」
「ありがとう…！困ってたんだよー」
「ごめんね　危ないことさせて…」

喧嘩を見守っていた被害者であるところの女生徒達が、
口々に彼女にお礼を告げ、褒めたたえる。

「こんなのどうってことないよ　こいつらが弱すぎるだけだし」
それに対して屈託のない笑顔で応える。

こっそり見ていた男子生徒も、彼女の強さに加え
下世話な部分でも彼女を持ち上げていた。
「清水っていいよなぁ」
「つえーし顔も美人だし」
「しかもあの胸、あのケツｗ」
「なーｗ」
「やりてぇｗｗｗ」

だが、最強で正義感が強いイイ女…
というのは彼女の表の顔で、その本性は虫唾の走る
クソ女だった。

以前、俺がクラスメイトの女子連中に虐められていた時に
助けを求めたところ
「やられたくないなら強くなれば良いのよ
何なら特訓してあげようか」
といってきた。
それならば…と頼んだら、特訓なんて名ばかりで、
ただボコボコにぶん殴られ、倒れたところを足蹴にされた。
「虐められるのは、あんたに何か原因があるんじゃない？
ていうか
女の子にからかわれたぐらいで虐めなんて大げさな…
メンタルもフィジカルも弱すぎるでしょ
何か…あんたを見てると無性にイライラするのよね」
と突き放された。
それだけでなく、俺への虐めへ積極的に加担しだしたのだ。

清水が加わるまでは、この3人…
堤(つつみ)、山下、島村から受けていたいじめは
≪俺は負け犬です≫と書かれた紙を背中に貼られる、
横を通ると
「くさーい」とにやにや馬鹿にされる、何か話すと笑われる、
教科書等の物を隠される…等々、
今現在に比べれば程度が軽いものだった。

だが、清水が加わった途端、
一気に暴力方向へエスカレートしていった。
寒い日に冷水を頭から浴びせられ、着替えを隠されたり、
頭に袋をかぶせられ全裸に剥かれ、
複数人で殴る蹴るされたり。
辛くて泣いてしまったら、その顔を無理矢理笑顔に落書き
されてSNSに上げられたり、
≪弱くてごめんなさい≫踊りを踊らされ、動画投稿サイトに
上げられたり…。
挙げると切りがないほど
あの手この手で尊厳を破壊されていった。

もうだめだ…俺なんて…もう…
限界に達していたある日、
教室に入ることが出来ず保健室へ登校した俺は
ぼんやりとスマホを弄っていた。
すると…
…何だ？
アプデしていたアプリが見慣れないアイコンに…？
時間停止アプリ？
何でこんなものに…ウイルスとか？
変な場所触ったかな…。

確認のためアプリを適当にいじってみて気がつく。
さっきまで聞こえていた校庭の生徒たちの声が全くしない。
時間停止中
start
それどころか、周囲で聞こえていたあらゆる音が消えている。
これは一体…何が起こっているんだ？

違和感を覚え、保健室から出ると学校内を見回す。
止まってる？　外の景色も…人も？
全部止まってる…!?
嘘だろ…こんな事が…
これ本当に…時間停止できる…とか？
スマホの画面で怪しく光るアプリと周りの光景を
交互に見つめる。

意を決して教室に向かうが、その道中でもやはり
動いているのは自分だけだった。
自分のクラスに着くと、見慣れた三人組を発見した。
堤(つつみ)、山下、島村だ。
楽しそうに何か話している様子のまま固まっている。
試しに堤のケツをぶっ叩いてみる。
反応はない。
残りの2人もケツをたたいたり鼻をつまんだり
頬をつねったりしてみたが無反応だ。
…。
ごくり、と喉が鳴る。

3人の中で一番胸がデカい堤に近づき、おそるおそる
服を脱がせる。
ブレザー、カーディガン、シャツ、ブラジャー…
次々と脱がせていくが上半身全て剥き終わっても反応は無い。
そのまま下半身も全てはぎ取る。
教室内で、素っ裸で棒立ちにされる堤。
さらけ出される、おっぱい、マンコ、ケツ…。
もう我慢できない。

試しに乳首をつまんでみる。
コリコリとした、それでいてクニュクニュとした
不思議な触感。
時間が止まっていても、石のように硬かったりは
しないんだな。
その事にほっとしながら、俺は想像に胸を膨らませる。
ということはきっと他の部分も…。

彼女の後ろに回り、大きな胸に触れる。
ふにっ　柔らかい感触が手に伝わる。
掌ごと埋もれてしまうほど張りのあるおっぱいをこねるようにムギュッムギュッと揉んでいく。
ぐにぐにと手首を回しながら指で乳首をぷにゅぷにゅと押し込む。
俺は次第に大胆になっていく。
ぐにぐにと揉みしだきながらも指と指の隙間ではさんだ乳輪部分をキュッと摘まむとブルブルと震えながらその中央にある乳首がさらに勃起してきた。
手の平全体で零れ落ちる肉をこね回しながら指の腹でキュキュッと乳首を抓り上げる。

肌が汗をかき、俺の手に吸い付いてくる。
ふと視線を向けた先の堤の顔が上気してきている。
この状態でも感じるのか？
むしろ動き出したら…そんな疑問や恐怖が頭をよぎったが、
もう俺はこのシチュエーションに
ギンギンになっていた。
セックスなんてしたことのない童貞の俺に、この状況を
我慢できるはずもなく…。
少し様子を見たが、女も周りも動き出す気配はない。
もういいや…このまま犯してやる…！

俺は堤の腰を引き寄せグッと密着させるとそのまま
一気にちんぽを突き立てた。
夢中で膣の最奥に向かってチンポを叩きつけ、快感を貪る。
肉の壁による軽い抵抗感を抜けると今度は逆に
にゅるるっと吸い込むように膣襞が蠢き
勃起したチンポが奥へ奥へと誘われる。
彼女の身体は少し震えながらも静止したまま、
俺の激しい動きを受け入れている。

膣内を埋め尽くす肉の棒を挿し込まれたオマンコは
ぶるるるっと痙攣しながらさらに締め付けを強化してきた。
ゆっくりと引き抜こうとするとバキュームするように
肉が絡みついてきて再び内部へと引き込まれる。
このアプリ…もしかしてこういう行為をするために
作られたものなのでは…？
体が柔らかかったり、マンコが濡れたりと色々と都合が良い。
快楽に溺れながら、頭の片隅でそんなことを思う。
だが、そんな思考とは裏腹に、初めての挿入でちんぽに
与えられる快感によってそんな考えはかき消される。
マンコが中へ吸い込む力が働き
それがさらにピストン運動を加速させた。

すでにとても熱くなった膣内は次から次へと粘液質の汁が溢れ始め、潤滑な動きをサポートしつつも肉襞が絡み付ききゅうきゅうと締め付ける。
もうダメだ、出る……！
亀頭が膨れ上がった瞬間、ドクンッと熱い濁流が尿道口を押し開いて噴出し彼女の膣内を白く汚していく。
ビュルル！ビュルーッ!!
びゅくっびゅくびゅくっ　びゅくびゅくっ　どぷっ
ビクビクとチンポが震えるたびに尿道に残ったザーメンが勢いよく射出される。
相手の事など気にしない、俺が気持ちよくなるだけの射精。
それでいてオナニーとは違う、女を孕ませるための射精。
ごぽっ……ごぽっ……ごぽごぽっ
溢れた精液がいやらしく、汚らしい音をたてながら彼女の股間から噴出する。

ふぅ…
一息ついて残りの2人に向き直る。
こいつらも犯してやる…！
見下して虐めていた相手に犯されるなんて、ざまぁない。

俺は山下の服を脱がせ後ろに回ると、マンコに乱暴にチンポを突っ込んだ。
全く濡らしていなかったが俺のチンポは一度出した精液でヌルヌルだったのでスムーズに挿入することができた。
既に堤を犯してこの時間停止のおおよそを掴んでいた俺は余計なことを考えず、ただ快感を得るために腰をふる。
その間も山下は俺を馬鹿にしたあの時の薄ら笑いと同じ笑みを浮かべながら無抵抗で俺に犯されている。
そんな彼女の膣内に精液をブチまけると、俺の中で山下はもうどうでもいい女になっていた。

残った島村はさらに雑に扱ってやった。
正真正銘オナホ扱いだ。
腰を持ってマンコの中身が気持ちいい角度になるように
調整して、俺のチンポに押し付ける。
顔も見ずに、ガシガシとこの女の身体を自慰する道具と
して使う。
そんな島村オナホに中出しをした後には、コイツは
俺の中で取るに足らない存在になっていた。
今後この女にどんな罵詈雑言を言われようが、
気にも留めないだろう。

3人に対しキンタマの中身を全部吐き出すほど
膣内射精をした後、俺は彼女たちを元の場所に立たせる。
そして、自分の席に座り時間停止を解除した。

「いひゃあああっ！ひゃあぅっ……
くふぁあっ、はぁ、あひぃっ……あんぅッ……
はぁ、あああっ……‼」
「ひぃっ、何⁉　あひぃっ……や、やぁぇ……ひやぁっ！
いやぁあああああ　あぁ！」
「や、やだぁっ……だめぇっ……気持ちいいっ……
気持ちいいの、怖いっ……こ、こんなの……だめっ……
イッ……やぁっ、あぅっ……くふぁあああっ、あああんっ！」
目を見開いて悶絶し、叫び声をあげながら
全裸のままビクビクと痙攣する３人。
「は⁉ 何⁉」
「きゃぁあああ」
「うわっ…ひぃいっ！」
突然、全裸アヘ顔絶頂するクラスメイトに驚愕する周囲の
生徒たち。

「ひゃああああああああ♥
あああああああああああああああへぇえええ♥」
「あ♥あ♥あ♥あ♥あ♥あ♥
ああああああああああああああああ♥」
「あああ♥　あ♥　あ♥　ひぃあ♥　あひぃ♥
あへぇえええ♥」
愛液や小便をまき散らし、何度も何度も絶頂する彼女達。
そして最後は意識を失い、その水たまりに倒れ込んだ。
その姿を呆然と見つめていた俺は、ようやく我に返る。
この時間停止、解除したとたんに停止中の感覚が一気に
押し寄せるのか⁉
これなら…これを使えば…！
最強だろうが何だろうが関係ない、あの女…清水紗希に
最高の仕返しができる…‼

第一章

教室で時間停止

あいつら3人への復讐は済んだ。
しかし清水だけは簡単に許す気にならない。
さて、どうしてやろう……。

2時間目の現国の授業中、暴力女こと清水は
机に突っ伏して眠っていた。
それを見た教師が彼女の頭を丸めた教科書で叩く。

「いったぁ　何すんだよ」

「授業中に寝るな　読め　24Pの頭から」

「はぁい」

ふてくされた様子で立ち上がり、めんどくさそうに
教科書を開く。
くすくすという笑い声や、ばーかなど囃（はや）し立てる声が
教室のあちらこちらから聞こえてくる。

それのどれもが好意に満ちていて、清水の好感度の高さ、
いうなればクラスの愛されキャラである事を感じさせられ
反吐が出そうだった。

皆の注目が集まった丁度良いタイミングなので、
時間を止めてみる。
世界から音が消え、だれも微動だにしなくなる。
今朝と同じだ。
清水の目の前で手をひらひらと降ってみたが
瞬（まばた）き一つしない。

カーディガンとシャツをたくし上げると大きなおっぱいがまろび出た。
意外にもこの暴力女、髪や首筋から良い臭いがしていて興奮してくる。

後ろから抱き着いてブラジャーをはぎ取り、
がむしゃらに胸を揉みしだくと、柔らかなおっぱいに指が沈み込む。

抱えるとたぷたぷと弾む胸の感触や、肉厚なおっぱいのみっちり感を楽しみながら徐々に中央に向けて手を進める。
だが、本来ならあるはずの感触が指に当たらない。

不思議に思い正面に回ると、でかいピンク色の乳輪が目に飛び込んでくるが、あるはずの位置に乳頭が見当たらない。
控えめに膨らんだ乳輪の中央、本来乳首があるべき位置には小さな切れ込みのように見える一筋があるのみだった。俗に言う陥没乳首というやつか。

初めて見るそれに興味を惹かれ、乳輪部分をつまんで
外側から押したり撫でたりとマッサージしてみる。
すると何か固い芯のような物が感じられるように
なってきた。
乳輪の中で乳頭が勃起しだしたのだ。
清水の体が熱くなり、汗ばんでいく。

さらに弄っていくと…
プルン
突端が頭を出した。
出てきた乳首を指で摘まむ。
指で転がすとむくむくと大きく固くなる。

ここ数日試してみて分かったことだが、俺の触れる物は
少しだけ俺の時間の流れの影響を受けるらしい。
どうやら乳首がかなり弱いようだ。
ブルブルと震え、顔は真っ赤に上気している。

乳輪ごと強くつねり引っ張るような動きをしつつ、右の乳首を舐めしゃぶり、吸い付く。
ちゅうちゅうと音を立てて吸っていると、逆側が物欲しそうに震えているのが分かる。
片方だけ完全に勃起し、もう片方は隠れたままというアンバランスな状態がおかしく
なってきて、そのまま放置することにした。

暴力女の膝を曲げ床につけると、俺はズボンから
ちんぽを取り出し胸に挟んだ。
清水の口を乱暴に開いて首を下に向けさせて、
よだれを胸に送り込む。
潤滑剤の代わりだ。

間抜け面でぽかんと開けた口からよだれを垂らし、
俺のちんぽを胸に挟んでいる姿は滑稽だった。
女の両胸を胸を掴むように固定すると、乳圧が
ちんぽをみっちりと包み込む。

竿全体を包み込んだ乳房はぐにゃりぐにゅぐにゅと
いやらしく形を変えながら心地良い愛撫を続けてきた。
気持ちいい。
刺激もさることながら、このムカつく女の胸を蹂躙して
いるという思いが、俺の快感を更に加速させる。

おれはがむしゃらに腰を振った。
時折乳頭が露出している右の乳首だけを刺激して
やりながら何度も何度も腰を前後させる。
柔らかいおっぱいの中にみちみちと挟まれ、ぬるぬると
刺激されてどんどん精液がせり上がってくる。
ドロリとした熱い塊が尿道を押し開きながらその出口まで
一気に走り出していく。

俺は清水の胸からチンポを引き抜くと、間抜けに大きく
開けられた口の中に向かって射精した。
びゅくっびゅくっびゅるるるっびゅっびゅっ
自分でも引いてしまうような量と粘度の精液が
この女の口へと放出される。

「ふぅ……」
満足した俺は、床に座らせていた清水を元の机の位置に立たせた。
その上で彼女を改めてよく観察する。
口に入りきらなかった精液が首を伝い、空いた胸元からダラダラと流れていく。
その液体は両房の谷間を経由し、腹を伝い、そのままスカートのウエストベルトあたりに溜まっていく。

「うわぁ　気持ち悪そうｗ」
そう言いつつ、その精液をそのまま肌に残したまま
彼女にブラ、シャツ、カーディガンを着せる。
さらに追い打ちとばかりに、服の上から身体を揉み
まくってやった。
精液がねちゃねちゃと肌や服の内側を汚していく感触。
さぞかし気持ち悪いんだろうなｗｗｗ
清水と自分の服を整えた俺は席に戻り、時間停止を解除する。

「!? にがい…!? 何このにおい…
ぐっ　ごぼっ　げほっ　ごほっ」
口と鼻から精液を噴き出す。

「清水⁉」
何が起こったのか分からないといった様子で、
教師が声をかける。
「な、何だ⁉　ぶごっ　げほっ　ごほっ　えっ
ゲホッ　ゴホゴホッ」
慌てて顔を手や服の裾で拭うものだから、顔も
カーディガンも俺の精液まみれになってしまう。

「んあっ　あっ　ん♡　あっ♡」
鼻水を垂れながら精液を吐き出し、喘ぎだす。
その様相はいつもの清水からは考えられない、
情けない姿だった。
「くそ…っ　何なんだよ…っ　くぅっ」
だが、そこは清水。
曲がりなりにも自称最強の女。
何が起こったか分からないながらも、これ以上の
醜態を晒すまいと耐えようとする。

しかし…
「はぁ!?何だ!?　えっ　あっ　ぬるぬるする
あっ　あっ　ん♡　あああぁあっ♡」
快感と不快感が交互に襲ってきて耐えきれない。
「えっ　あっ　あん♡　あっ♡　あッ♡　嘘　何
いや　あああぁあっ♡」
右乳首を執拗に責めた分の感覚も襲ってきたようだ。
びくびくと体を震わせ絶頂する清水。
だらしない顔を晒し、よだれを垂らして虚空を見つめる。
こいつ胸だけでイキやがったｗｗｗ
「おい！
どうしたんだ!?」
何が起こったのか分からないといった様子で、教師が声をかける。
「保健委員、清水を保健室へ連れて行ってやりなさい」
教師に言われ
「はい」
俺は彼女を連れて教室を出た。

第二章

保健室 自慰観察

保健室に着くと、清水は俺をにらみつけると
「とっとと出て行けよ　クソが」
と、いつもの調子で凄んできた。
「ああ　うん」
苛ついたが、何か違和感を感じて彼女をよく観察する。
すると左胸をやたら気にしているようだ。
（へぇ…）

ここはおとなしく退散したふりをして様子を見てみよう。
保健室を出て少し時間をつぶし、こっそりと戻る。

すると彼女が寝ているはずのベッドから、押し殺したような
吐息が聞こえてきた。
（やっぱり）
時間を止めてベッドを囲むカーテンを開け、掛け布団を
めくりあげる。
そこにはカーディガンの上から左乳首を引っ張り、右手を
下着の中に突っ込みオナニーしている清水の姿があった。
そのさまを何枚か撮影し、時間停止を解除する。

「あっ♡　ん…⁉」
スマホを向ける俺が突然現れたことに驚いた清水が
目を見開く。

「てめぇ　何やって…！」
殴りかかってきたので再度時間を止め、それを躱（かわ）す。

ついでにベッドへ彼女を戻すと、スカートと下着をはぎ取り
足を開いて座らせる。
「うわ…」
思わず声が出る。
この女のクリトリスが予想以上にデカかったからだ。
勃起したそれは俺の親指ほどはあるだろうか。
陰毛も生い茂り、マンコはびちょぬれで、しかも陥没乳首とは。
この女、人のこと散々見下してたけど服の下にはこんな
残念でエロい体を隠してやがったんだなぁw

オナニーによって勃起している左乳首をさらに引っ張り、
でかクリをシコシコとしごいてやると、ぴっちりと
閉じたマンコから、濃厚な愛液がだらだらと垂れてくる。

その上でクリトリスをすりすりと指の腹で撫でてやると
ぷしゅっ
清水の体はさらに汗ばみ、股間から潮が噴き出した。
こいつの体、弱点だらけじゃねーかw

服を戻し、時間停止を解除する。
「よこせぇあはぁああ♡」
清水はスマホを奪い取ろうと掴みかかったつもりだった
のだが、体が想定外の体勢になことに面食らって
喘ぎながらこけてしまい床に突っ伏す。
「あはぁああ♡　あああああん♡」
そのまま俺の目の前で、体を震わせ絶頂した。
愛液が下着を貫通しスカートにまで滲み、染みを作る。

イった余韻でぴくぴくと情けなく体を震わせる
清水の目の前にオナニー画像と、でかクリ、
丸出しマンコ画像を見せる。
「この画像、消して欲しかったら放課後旧校舎裏に来てよ」
声をかけると保健室を出て行った。

第三章

旧校舎裏 決闘

放課後。
清水は憤怒の形相を浮かべながら旧校舎裏にやってきた。
「絶対に許さない　ぶっ殺してやる」
「うわぁ　こわいなぁ
でも、万が一俺が清水さんに勝てたら、これまでのこと
全部謝ってくれる？」
「はぁあああ？」
顔いっぱいにさらなる怒りを乗せて俺に凄んでくる。
「殺されたいみたいだな！」
言いながら俺との距離を最速で詰めて殴りかかってきた。

時間を止める。

「おーおー　こわぁ　躊躇いなしで顔面狙ってきてるじゃん
人としてどーなの　この女」
時間を止めていなかったら、その拳は確実に俺の顔に
ヒットしていただろう。

止まった時間の中、殴ろうとしてきている清水の顔に
一発ビンタを入れ、後ろに回ってケツをぶっ叩き、
その後全力で脛(すね)を蹴り飛ばす。

清水を足で転がし仰向けにさせる。
いいザマだ。
コイツは自分に何が起こったか、まだ全然分かっていない。

潰れたカエルのような惨めなポーズの清水の腹を踏む。
ひとまずこれくらいでいいか。

時間停止解除。
「ぐはっ」
痛みと視界の回転で何が起こったのか理解できていない清水。
それを上から覗き込み罵倒する。
「よっわ！　急にこけるからびっくりしたわｗ　大丈夫～？」

「ぐっ　くっそ！」
怒った清水は俺から距離を転がって取ろうとする素振りを
見せるがそうはさせない。
再び時間を止める。
スカートの下には露（あらわ）になった下着が覗く。
またオマエの好きなところをいじってやるよ。
俺は止まった時間の中で抵抗できない彼女の股間を
土足でこする。

次第に下着に染みが出来てきた。
足を離すと下着の股部分が小さく盛り上がっている。
こいつ、足でこすられて感じた上にクリトリスもフル勃起
させてやがるw
何とも間抜けな姿に笑いが込み上げてくる。

俺は彼女のそんな惨めで無様な様子を何枚か撮影し、最後に
ダメ押しとばかりに腹を数発追加で踏んでから時間を戻す。

「かはっ！　はっ　はあっ！
なっ⁉
なんでっ！　かはっ！」
何が起こったか分からず、腹の痛みに苦しむ清水。

「んっ!? んんっ! あっ ああん んっ くうっ…! いっ ぐうう」
股間に襲ってくる快感と腹を踏まれた痛みとで悶絶する清水。
「清水さん弱くなった?動き遅くなってない?」
「そんな そんなわけ… …クソが!」

まだ心が折れていないのか。
俺は半ば呆れつつ、また時間を止めて彼女の体を抱え起こすと後ろから首を絞める。

しばらく絞め続けると、顔色が悪くなり口角から泡を吹き始めた。
こんなもんかな。
腕を緩め、時間停止を解除する。

「ぐるじ…　ぐっ　いづの間に　ぐえ」
気付かぬうちにこの体勢になってしまっていては、さすがに振りほどけない。
清水は濁った声を上げながら締め落とされ、意識を失った。

いつもの彼女からは想像もつかない無様な姿。
これはあとでコイツに見せつけてやらないといけないな。
そう思った俺はパンツ丸出しで舌を垂らして泡を吹く清水を撮影した。

「起きろ」
撮影を終えた俺は、ぺちぺちと顔をたたいて彼女を起こす。
「ん…あ…」
「俺なんかに締め落とされちゃうとか　笑えるんだけど
何かおしっこも少し漏れてない？ｗ」
「え…」
言われて朦朧とした意識の中自分の下半身に目をやる清水。

視界に飛び込んでくる、愛液と締め落とされたときに
少し漏らしてしまった尿で染みのできた丸出しのショーツ。
股に感じる布が微かに貼りつく不快感。
「俺なんかに負けた気分はどう？ｗｗｗ」
煽りながら先ほどの画像を眼前に突きつけてやる。

「～～～～～～～～～～～～～ッ」
顔を真っ赤にして睨みつけてくる清水。
「これに懲りたら、もう俺に関わるのやめてよね」
そう言って踵を返しその場を離れようとする。
……が、
その時、清水が素早く起き上がる気配を感じた。

嫌な予感がしてとっさに時間を止める。
振り返ると置いてあった角材を、俺めがけて
振り下ろそうとする清水の姿があった。

「あっぶねぇ…」

角材を奪い、遠くに放り投げてから停止を解除する。

「えっ　あれ?」
握っていたはずの角材の感触が消え、無くなっていることに驚いている清水に向き直る。

「勝てないからって武器を使うんだ
清水さんって本当に最低だね　卑怯者　クズ　死ねよ」
「……ッッ！」
痛いところを突かれたのか言葉に詰まる清水を無視して
その場から退散した。
あの女は本当に……
とことん心を折ってやらないとダメみたいだな。

第四章

雑魚にボコらせる

清水を痛い目に合わせる最高のタイミングはないものか
と考えていたある日、
清水が他校の不良グループ3人組に因縁をつけられてる
場面に遭遇した。

人気のない場所で、喧嘩が始まる。
男たちは最初は一人づつ清水にかかっていったが、
あまりに彼女が強いので、3人がかりで攻撃し始めた。

「はっ　卑怯者　1人で喧嘩も出来ないんだ　だっさぁ」
「うるせえ！」
煽られた男たちの怒りのボルテージが頂点に達し、清水が
その隙をついて反撃。
腹を殴られ地面に転がる男。
あっけにとられるもう一人を蹴り飛ばし、さらに後ろから
襲ってきた相手は裏拳で顔をつぶす。
3人を地面に転がし、呆れたような表情をしている清水。

「弱すぎでしょ　パンチの当て方、教えてあげようか？」
良い気になって、嘲るような笑顔を浮かべながら男たちを
さらに煽っている。
よろよろと立ち上がりながら、怒りに任せて殴りかかる
男たち。
だが、あんな動きでは彼女を捉えることはできないだろう。

そこで時間を止める。
清水なら難なく避けられるであろう攻撃。
だがその軌道上に彼女の顔面を置く。
もう一人の男をしゃがませ、清水の股間に拳が当たるよう移動させる。
もう一人の拳はボディがいいかな。
そうやって男たちのパンチが命中するようお膳立てした俺は
その場を離れ、時間停止を解除した。

「ごぼっ⁉　ぶうっ！
ごえっ！」

清水は顔面、腹、股間を同時にぶん殴られ地面に突っ伏す。
殴っていた男たちにとっても、気づいたら清水に拳が当たっていたので目を白黒させて驚いている。
が、醜い声を上げて憎たらしい女が地面で顔面腹股間を交互にさすりながら転げまわっている姿を見て、すぐに細かいことを考えるのをやめ、蹴りで追撃を入れながら罵りだす。
「パンチの当て方教えてあげようか？キリッ　じゃねーだろ」
「よえーのはおめーじゃねーか　ギャハハハ」
「オラ！オラ！死ね！」
自分より遥かに弱い相手に不意を突かれて劣勢になったことがよほど悔しいのか酷く顔をゆがませて唇を噛んで耐えている。
せっかくだからここで犯してやるか。

時間停止。
俺は清水に近付くと四つん這いにさせ、ショーツを剥ぎ取る。

指でぴっちりと閉じた縦筋マンコを開くとその中にうっすら
膜があるのが見えた。
へぇ、処女か。
まぁこんな暴力女とセックスできる奴なんていないよな。
折角だからこいつの処女はもっと悲惨な場所で奪うとするか。

じゃあとりあえずこっちだな。
後ろのピンクの窄まりを親指で開く。
ぎゅうぎゅうに閉じたそこは指すらきつくて入れるのに難儀した。
だが俺はこんなこともあろうかと、持ってきていたローションを
取り出し、清水のケツ穴にぶっかける。

無理矢理2本指を入れ、めちゃくちゃにかき回し、拡げる。
暫く強引にいじっていると多少はほぐれてきた。
これなら、そろそろいけそうだ。

ちんぽを清水のアナルにあてがい、強引に先端を挿し込む。
さすがにこの大きさのものはそう簡単には入っていかず、
亀頭を押し付け、ぐりぐりと動かしながらねじ込んだ

やがてカリの部分まで入りきり、ローションの滑りもあって
何とか動くことができるようになった。
清水は体全体、特に胸元にぐっしょりと汗をかき、鳥肌を
立てている。
内臓に異物が入ることに体が反応しているのだろうか。

腸内は激しい伸縮を繰り返し、俺を押し出そうと外へ外へ蠢く。
それを無視して奥へと突き入れ、最奥まで到達したら、ことさら
ゆっくりギリギリまで外へ抜き出す。
何度も繰り返すうちに、結合部分のローションが白く濁り
足と足の間で糸を引く。
単調な腰の動きに時々、違う方向への突きを加える。
突き入れるごとに飛沫のような粘液が吹き出す。

挿入しながらクリをいじったりすると、きゅきゅっとアナルが収縮し心地よい。
それに気を良くした俺は、今度は清水の乳輪を探し出すと、外側から円をなぞるように刺激して、陥没している乳頭を乳輪内部で軽く勃起させた。
勃起したその芯を乳輪上からしこしことしごいてさらに勃起させ、乳輪の左右から潰すように押すと、ついに内部から乳頭が飛び出してくる。
それを刺激し始めると、効果はてきめんだった。
腸内が痙攣し、マンコから卵白のようなドロドロとした愛液が溢れ出してくる。
止まった時間の中、俺たちの体のぶつかり合う音と、厭らしい水音だけが辺りを満たす。
身体の奥の奥までちんぽを押し込むと、中がこれまで以上に熱く強く蠢くのが分かる。
どうやら乳首とアナルへの刺激で何度かイっているようだ。

「もう……イク!!」
びゅっびゅっ　びゅびゅびゅーびゅーびゅるびゅるびゅるびゅる
アナルの最奥に向けて大量に精を解き放つ。

「はぁ～　出たぁ」
一息つくと別の物ももよおしてきた。
尿意である。
丁度いい、このまま女を文字通り便器替わりにしてやろう。
しぃいいいいいいいいいいい
じょろろじょろろじょろじょろ　じょろろっ　じょっ
そのまま小便を腸内に放つ。

すべて出し切った後、ずるりとちんぽを引き抜くと
清水のアナルは赤く充血していた。
太いものを咥えこんでいたせいか、その穴は半開きに
なっている。
俺は記念にその姿を撮影したのち、清水に下着を履かせ
土下座状態の体勢をとらせた。
男たちも時間停止前に清水を蹴っていた位置に戻す。
そして、4人から離れた位置に移動すると時間停止を
解除した。

「ひっ　痛い　痛い痛い　いやぁああああ」
清水からいつもとは違う甲高い声が上がる。
明らかに涙声だ。
男たちは自分たちの蹴りで清水が泣きわめきだしたのだと
勘違いしてますます良い気になっている。
清水はケツを押さえている所からみても、俺に無理矢理腸内に
ちんぽをねじ込まれた痛みに襲われているだけなんだろうけど。
殴る蹴るの外的な痛みには強くても、内臓を抉られる感覚は
初めてだもんなぁ。

「いたいよう　いたいいいい　いやぁ　いたいいい
やめてぇえ」
涙鼻水を浮かべてブス顔で大号泣している。
男たちは蹴りながら清水に罵声を浴びせる。
「いい気味だ」
「これからは　ちょーし乗んなよ」
「死ね　ブス！」
低レベルな暴言にすら、清水は返す余裕がない。

痛みに引き続き、大量の快感も襲ってくる。
「あひ　おほ　おっ　おおん　あっ　ああっ
ああ　おほぉ　おお　おおん」
気の強い女はアナルが弱いって典型だな。
初めてのくせにめちゃくちゃ感じてんじゃねーかw
やばぁw

しかも
「ひぃい　おほぉおおおん　おおん」
尻から俺の精液と小便が噴き出しみるみる下着を汚す。
痛み、異物感、快感、違和感のすべてが一気に押し寄せ、
体中から液を噴出させて大きく吠える。
「うわ、こいつ漏らしやがった」
「ぎゃはははは　マジかよ」
「きったねぇなぁｗｗｗ」
傍から見ると、あの清水が蹴られて大泣きしながら
おしっこを漏らして土下座しているようにしか見えない。
「やめてぇええ　おほぉおおおおおお」
この動画を清水に見せるのが楽しみだなぁｗ
「ぎゃはははは」
「俺ら清水やったとかヤバくね⁉ｗ」
「証拠に記念撮影しとくかｗｗｗ」
……。
これ以上こんな雑魚３人を良い気分にさせるのも癪だし、
このあたりにしておくか。

時間を止めて、清水に近づく。
どうやら苦痛や快楽を一気に味わったせいで気絶して
しまっているようだ。
そんな惨めな彼女を、男たちから遠く離れた木陰に隠すと
時間停止を解除する。
そのうち目を覚ますだろう。
俺はそこに清水を放置して、そのまま帰宅した。

第五章

教室で衆目羞恥

翌日。
登校し教室に入る。
「……!!」
と、清水が俺に殴りかかってきた。
いつもなら陰で暴力をふるう清水が、クラスメイトが見ているにもかかわらず襲い掛かってくるとは予想外だった。

こいつの評判を落とすチャンス、
どうせ後からやり返せるし…と甘んじてその攻撃を
顔面に受ける。

「いってぇえええ」

床に転がる俺を見て満足げな清水。

「どうしたの紗希ちゃん⁉」

クラスの清水と仲が良い女子生徒が驚いて声を上げる。
清水は他の人間から見れば自分より弱いものに暴力を
振るわず、困った人を助けるために力を使う正義感の
強い人間ということになっているもんな。
俺みたいなひ弱な底辺を殴ったら、そりゃあ驚かれる
だろう。

「こいつ、私のこと隠し撮りしてたから…！」
「⁉」
周囲の女子たちが軽蔑の視線を俺に送りながら口々に非難してくる。
「嘘　サイテー」
「キモ　こっち見ないでよ」
「やば…他の人も撮ってるんじゃない？」
「そんなことしてない…」
「じゃあスマホの中見せてよ！」
「…」
こいつ…脳筋のくせに悪知恵だけは働くんだな。
こうやって公の場で俺の立場と逃げ場を無くしてデータを消させようってわけだ。
時間を停止し、スマホの中の清水のデータを別の場所に移しフォルダの該当データを消去する。
「ほら…」
清水に手渡し、女生徒と一緒に中を確認させる。
「⁉　どこかに隠してるんでしょ⁉」
「…勘違いじゃない？　酷いよ清水さん」
「紗希ちゃん…？」

「みんな、こんなキモくて何考えてるか分からないような奴と
いつもあなた達を助けてあげてる私、どっちを信じるのよ……！」

「え……」
「そんな言い方なくない？」
「清水さんどうしちゃったの……？」

周囲の反応を見てしまったという顔をする清水。
繰り返すが、清水は自分より弱い者の味方、困った人を助けるために力を使う正義感の強い人間ということになっている。
それが、俺のようなクラスの底辺を見下す発言をして、かつお前たちを助けてやっているという驕（おご）った発言をしてしまったのだ。

「……」
女子たちはこういう事に対して敏感だ。
最近流れている清水の敗北の噂も相まって、おそらく彼女の評価は少し悪い方に変わってきているだろう。

「違う　今のは　誤解だ！」

ざまぁない。

だが殴られた分と俺をハメようとした分はきっちり返させてもらおうかな。

俺は再び時間を停止した。
教室内、
ほかの生徒が俺と清水に注目している中で下半身を
全て脱がし、大きく股を開いた姿勢をとらせる。

自分の行為を棚に上げて俺が悪いと言っているコイツを
見ていると、虐められるのは自分の責任と言われたことを
思い出して嫌な気分になったので、下着を頭に被せてやる。
「ぶぶっｗｗｗ」
真剣な顔をして自分のパンツをかぶるコイツの姿は
最高に間抜けだ。

ぴっちりと閉じていたマン肉を開くと、甘酸っぱい
エロい匂いに加え、こいつには似合わない女特有の
甘い良い匂いが漂ってきた。
俺なんかにちんぽを入れられるなんて、この女に
とっては相当屈辱に違いない。
そう思うと気分が高揚し、ちんぽが熱を持つ。

清水から服をはぎ取ると、マンコにちんぽを押し付ける。
ちゅむ
水音を立ててちんぽがめり込んでいく。

かなりキツいが清水の体に配慮することなく
どんどん腰を進めていると、何かが亀頭の先に
引っかかる感触があった。
これが処女膜かな？

時間が止まっている清水には知る由もないが、今まさに
処女が奪われようとしていた。
そう、この女が大嫌いな俺によって。
無抵抗のまま、みんながいる教室で、自分のパンツを被って
見下していた男に奪われる…
それがコイツの処女喪失にふさわしい。

ちんぽをギリギリまで引き抜き、一気に腰を突き入れる。
ぶつり
皮のようなものを引きちぎった感触がちんぽに伝わる。
「おめでとう、これで清水さんは中古マンコだよ」
そう言って、さらに奥まで一気に貫く。
「これ、ぜんぜん濡らしてやってないし、めちゃくちゃ
痛いんだろうなぁｗｗｗ」

肉棒の先に、吸い付くようなまとわり付くような
キツい粘膜の感触を感じる。
強引な送出が快楽中枢を強制的に刺激し、脳が痺れる
ほど気持ちいい。
俺は清水の腕を掴み、力任せに引き寄せ、さらに奥を
蹂躙しようと一心不乱に腰を振った。
ちゅっ　ちゅくっ　ちゅむっ　ちゅぶっ
愛液が泡立ちあたりに結合部分からいやらしい音が
漏れ続ける。
濡れそぼった清水の膣内をちんぽでかき回す。
コイツも感じているのだろうか。
暖かい膣は激しく収縮しながら俺のモノに絡みつき
吸い付いてくる。
体を鍛えているからだろうか。
清水のまんこはなかなかの名器のようだ。

感触を楽しみながら腰を振っていると、膣がさらに
ぎゅっと締まり、俺のちんぽを絞り上げはじめる。
清水もイきそうなのだろう。
結合部から溢れる水音の粘着性が増していく。
「よし……いくぞ……いく……ッ！」
心地よい痺れがちんぽに集まってくる。
ちんぽから迸る液体を一滴残らず、膣内の奥深くまで
ものすごい勢いで流しこむ。
子宮を俺の精液でタプタプになるまで満たしてやって
から、ずるりとちんぽ引き抜いた。

「馬鹿にしてる弱い男の精子で子宮をいっぱいにされた気持ちはどうかなぁ」
コイツが時間停止解除後にみんなの前でどんな醜態を晒すか楽しみだ。そう思いながら服を着させていたが、股間から精液を垂れ流す清水の惨めな姿を見ているとまたムラムラしてくる。

…口も使うか。
俺は清水の体を曲げ、顔を腰の位置までよせると、そのまま
口内にちんぽを挿入した。
舌に裏筋をこすりつけながら、喉奥まで遠慮なく押し込ん
でいく。
ちんぽはどんどん大きくなり、清水の喉の奥で反り返って
いくのが分かる。
気分が良くなってガンガン喉奥を突いてやる。
「意識があったら苦しいんだろうなぁw」
口とちんぽの隙間から涎があふれ、逆流したのか鼻からも
鼻水と同時に吹き出している。
先走りと涎でぐちゃぐちゃにされた口内で、動き回る
ぬめぬめとした舌の刺激に加え、あまりに無様な状態と、
止まっていることで不釣り合いな怒りの表情の惨めさを
見ていると支配欲が刺激され、また射精感が高まってくる。

そろそろ限界が近い。
一層奥深くまでちんぽを咥えさせる。
頭の後ろを押さえつけ、喉の最奥に亀頭を差し込む。
「……イク!!」
ピュ　びゅっびゅっ　びゅびゅーびゅーびゅるびゅるびゅる
一度出したとは思えないほどの、すさまじい量の精液が
喉の奥へと流れ込んだ。

これまでの傾向を見るに、止めた時間の中でやった行為は、
時間停止解除で一気に襲い掛かっているように見える。
つまり、停止中に大人のおもちゃってを使いまくって、
気持ちよくさせてやれば、この女は快感で大変なことに
なるんじゃないだろうか？
そんな事を思った俺は自転車を走らせ、近くのアダルト
ショップから大量のエログッズを持ってきた。
さっきの刺激で感じたのかクリも乳首も勃起していたので
その部分にローターが当たるようにテープで固定する。
ついでにケツ穴も何か入れとくか。
極太アナルパールをローションまみれにして、ピンクの
アナルにぐいぐい押し付け1つまた1つと突っ込んでいく。
さて…この状態で暫く放置しておくか。
飯でも食ったら、保健室でのんびりと寝てこよう。

数時間後。
教室に戻ってきて、清水を観察する。
感度が格段に上がっていたようで、顔は真っ赤に
上気していた。
全身が汗だくで、近づくとむせるかえるような女の
匂いが鼻につく。

しかも、床には愛液と潮によって水溜りまでできていた。
「うわぁ、すごw」
この女の思った以上の痴態にニヤける顔が止まらない。
じゃあせっかくだから人が多い所で処女喪失と発情した姿をお披露目してあげようね。
俺は彼女の全身から手早くおもちゃを外し、パンツとスカートを履かせて時間停止を解除した。

「!?」
「いたいいいぃいいいいいいいい」
大声を上げて股間を押さえる清水。
突然、内股になって情けない叫び声をあげる彼女に、周囲は
何事かと驚きの視線を送る。
「いたいよぉおおおお」
まるで小学生のように大口を開け、涙を流す。
良い年をした女性がとても人前で見せて良いとは言えない
酷い表情だ。
「いいい　いたいいぃいいいい　ひぐっ　うぐううっ
いたいよぉおおお」
鼻水を垂らした大号泣に周りも声をかける事すらできずに
見守っている。
無理もない、あの最強の女である清水さんが馬鹿面晒して
大泣きしているのだ。
状況を把握できる人間なんて一人もいないだろう。

その上
げぇ～～～～～～つぷ
口を開けたまま喉奥に向かって俺が無茶苦茶にチンポを
抜き差ししたせいか、空気を大量に飲んでたらしい。
汚らしいゲップを放つ。
「ぷっ」
「今のゲップ、やばw」
心配そうに様子をうかがっていたクラスメイトから、
たまらず笑い声が上がる。

「～～～～～～～～～～～～～～～～～ッ」
さすがに清水も恥ずかしかったらしく、余裕のない表情に
さらに羞恥の赤みが加わる。
心配する者や笑う者、色んな感情が交錯する異様な空気の中、
彼女に別の変化が訪れる。
「おごっ　ごほっ　ごぼっ　ぶぶぅううう」
口から鼻から俺の精液を吐き出したのだ。

「ひぃ　ひぎいい　いたいいいい」
ジョロジョロジョロジョロ　ジョボボー
とうとう我慢しきれず、おしっこを漏らす清水。
普段の彼女を見ている生徒たちは信じられないという顔をして立ち尽くしている。
「ひぃいいん　みないでぇ　みないでぇえええ」
情けない声を上げながら涙と涎を垂らしいやいやと頭を振る姿は幼い子供のようで、彼女も見た目と釣り合っておらず見ているこちらが恥ずかしくなってしまう。
さらに、彼女の様子が徐々に変化してきた。
「あひ♡　ああっ♡　ああん♡」
艶っぽい声を上げて顔を赤らめ内股でもじもじとしながら震えだしたのだ。
「あっ♡あっ♡あっ♡あひ♡あっ♡　ああっ♡　あっ♡
あっ♡　ああん♡」
胸と股間に手を添えて腰をかくかくと振りながら愛液を撒き散らす。

「乳首　クリも　いや　何　気持ち良すぎて
おっ　おおっ　あっ　あひぃいいいい」
喘ぎ声もどんどん下品な物になっていく。

「おおん　おほぉおおお　おほぉ
おっ　おっ　おしり　壊れるぅ」
吼えるような喘ぎに半ば白目を剥いて舌を垂らし、ますます
激しく腰を振る。
ぶぶっ　ぶぅううう～
アナルパールで執拗に尻を弄ったせいで緩くなってしまった
のだろうか。
彼女は盛大に屁をぶっこいた。
開いてしまったアナルはさらに奥に潜む彼女の汚物を留めて
おくことができない。

「ひぃ　うそ　やだ　いやぁあああああ」
むりむりむり　みちみち　にゅりりりり
太く健康的な大便が尻尾のように彼女の尻からぶら下がる。

ぼとぼとぼと
動物園の折の中の動物のように、見世物になりながら脱糞する。
その姿は心底憐れであった。

だが彼女は便が直腸をする感覚ですら快感を覚えてしまい、
さらなる絶頂を重ねる。
「ひぎゃあ　あああ　おほおおお　おほ　おほっ
おおおおぉぉぉおおお」
最後には絶叫しながらイキ顔を晒し、その場に倒れこんだ。
「ヤバくない？」
「…誰か先生呼んできて！」
教室内は大騒ぎになり、周りの教室からも人が集まってきた。
何人かは動画や画像を撮っていたみたいだし、今日中には
学校中に彼女の痴態が知れ渡ることになるだろう。

第六章

暴力女 大敗北

それから一日、学校は清水の話題で持ちきりだった。
「清水さん　すごかったね」
「ね　具合悪いらしいけど　何の病気なのかな」
「何か悪い人から薬買って、それでエッチなことしてるせいっていう噂あるんだけど」
「ええ⁉」
「…でも…確かに　普通じゃなかったもんね」
「…うん」

噂の出どころは俺なんだけど、彼女の信望が揺らいできた今、清水を庇う者より、彼女の痴態を笑うものの方が増えてきた。
最高の気分だ。

でもこんなものじゃ足りない。
あの女は俺の、人としての尊厳を奪ったのだ。
完全に壊してやらないと気が済まない。

そんな時、明日の放課後に清水が以前から争っている他校のやつらに呼び出されているという話が耳に飛び込んできた。

これは絶好の機会だ。
逃す手はない。

アプリの新機能に、『対象の時間を遅くする』というものを見つけ、使ってみたいと思っていたところだ。
俺は明日、清水をどんな目に合わせてやるか計画を練った。

次の日の放課後。
清水が呼び出されたという公園に向かう。
なるほどガラの悪い奴らが入口をうろうろしていた。
おそらく見張りだろう。
だが俺は時間を止めて難なく公園内に足を踏み入れる。
奥まった場所まで進むと、池近くのちょっとした広場で
清水と男たち……30人はいるだろうか……が、
睨み合っていた。

「今日こそ思い知らせてやる」
「……はぁ　卑怯者　集団じゃないと女一人やれないんだ
クズばっか」
「……ッ　調子に乗りやがって
今日はマジでボコボコにしてやるからな！」
「何回同じ事を繰り返してるんだか……
弱いやつを何人そろえた所で私には勝てないと思うけど？」
「うるせぇ　死ね！」

言うが早いか男たちが清水に襲い掛かる。

…が、
それに対し、清水は顎(あご)、みぞおち、股間…
的確に急所を攻撃していく。
最小限の動きで複数人を捌き、瞬く間に地面に
男たちが転がっていく。

その圧倒的強さを見て、まだ攻撃を受けていない
男たちからも、みるみるうちに戦意が失われていく
のを感じる。

「うわぁ　清水さん　酷いことしてるねぇ」
「お前⁉　こんな所に何しに来た！」
「はぁ？　俺に負けてしょんべん垂れ流してたくせに、
ずいぶん偉そうじゃん」
俺の発言を聞いて、周りの男達がざわつく。
「⁉　違う　あれは…
私の体調が悪い時につけ込んでお前が…」
「へぇ　じゃあ、もう一回勝負してよ
ここにいる人たちが証人になってくれると思うしw
昨日は突然漏らしたりして何か可怪しかったけど、
今は体調悪く無さそうだしねぇ」
俺は周囲の男たちと、清水の足元に転がる男たちに
視線を向けながら、そう告げた。

「まさか、逃げないよねw」
「……ッあったりまえでしょ……！」
怒りと羞恥に顔を歪ませながら俺に向かって大きく踏み込んできた。
俺はあらかじめ用意しておいたアプリの新機能を起動する。

俺以外の人間の時間の流れを遅くする機能。
清水はその身体能力を生かし、本来ならものすごい速さで俺のすぐ側…
攻撃範囲内に距離を詰めてきているのだろうが、その機能のおかげで余裕で避けることができた。
「⁉　速い…！」
清水をはじめギャラリーの男たちが驚嘆しているのが見て取れる。

俺はそのままいとも簡単に清水の後ろをとると、スカートを捲り、
露になったでかケツを思いっきりぶっ叩いた。
俗に言う、小さい子が悪いことをして叱られるときにやられる
≪お尻ぺんぺん≫状態だ。
「やめろ……！」
逃げようともがく清水がうざったいので、清水の体のみ時間を
完全に停止させ固める。
バチィン、と大きな音を立ててケツを叩くたびに、清水から
艶めかしい声があがる。
「くっ！」「んぐっ！」「ぎっ！」

ギャラリーも、最強の女として畏れていた清水の痴態に
目が離せない様子だ。
折角だからサービスしてやらないとな。
ショーツを取り去ると、ほんのりと赤くなったケツと
桜色のマンコが白昼に晒される。
「おおー！」
「丸出し！」
「いいぞー！」
知能の低いガヤが飛び交う。
「やめろおおおおおお！」
それが羞恥を余計に煽るのか、耐えられない清水。
だが、指先一つ動かせない。

「やめて欲しかったら逃げればいいじゃん
自慢の馬鹿力でさw」
「くそっ　くそぉ!!」
もがいてるつもりで表情だけを変える清水が
憐れで最高に笑える。

「ほら、ほら！」
煽りながらケツをバンバン叩く。
「あっ！」「ああっ！」「ひあっ！」
すると、清水から嬌声が上がりだした。
もしかして、これまで停止した時間の中で快感と共に
痛みを与え続けたせいで、こいつは痛みで感じるように
なってしまっているのか…？

「おいおい　ケツ叩かれてびちょびちょに濡らしてるじゃん
清水さん変態すぎるでしょｗ」
ほら、とギャラリーに向けてマンコを見せつける。
「うぉぉマジだｗ」
「やばぁｗ」
「こっちはどうかなぁ？」

上半身を裸に剥く。
乳輪の外側から思いっきり押し潰す。
「いたぁ　やめ　いたいぃい」
「ええ？　でも乳首、乳輪の中で大きくなってきたよ
ほら　出てきたしｗ」
陥没していた乳首がむくむくと成長して顔を出す。
「んっ　んっ　やめ」
乳首の全てが露出する。
「あれ？前よりちょっと大きくなってない？
たくさんの人に見られて感じてるのかな？」
「クソが　適当なこと言わないで…ひぐうっ‼」
「生意気な口きくとこうだよ」

そう言うと俺は彼女の正面にまわり、体を掴んで起き上がらせると、思いっきり股間を蹴りあげた。
「うぎぃいいひぃいいい」
躱すこともできず、弱い部分に革靴でモロに攻撃を食らった清水は、バランスを崩して泡を噴きながら地面に突っ伏す。

俺はそんな彼女から残った衣服も引っ剥がし、正真正銘生まれたままの姿にしてやった。
「無様だね　あの清水さんが」
ケツ、股間、乳首…性感帯を攻撃されて息も絶え絶えといった様子の清水。
「どう?負けを認める?」
「…ッ」
意識を失う寸前、朦朧とした虚ろな表情で彼女は
「…あ…あ　私の　負け…だから　もう　やめて」
と敗北を宣言した。
最高の気分だ。

だがまだだ、まだ許すわけにはいかない。
「そう、じゃあ謝罪ってことで、俺のチンポにキスしてよｗ」
言うが早いか俺はバキバキに勃起したちんぽをズボンから
取り出した。
その提案にギャラリーがますます色めき立つ。
「マジかよｗｗｗ」
「こいつも変態じゃんｗ」
「いや、でも見てー」
「やれやれー」
「……っ　だれが」
さっきまで焦点が合わなかった目が、絶対にやるものかという
強い意志によって光を取り戻す。
清水さんはそうじゃなくちゃねｗ
でも……

【時間停止】
時間を止めて清水の口を絞るように握り、
ひょっとこ顔にする。
それを俺のチンポに思いっ切り押し付ける。
【時間停止解除】
「⁉ んぐぅうう～⁉」
「うわｗ
すっごい吸い付きｗキスで良かったのにｗｗｗ
よっぽど俺の事が怖かったのかなぁｗ」

「やべえだろあの女の顔w」
「動画撮ってネットに上げようぜw」
「もっと人呼んだ方がよくねw」
「…ッ　ぐッ」
「よくできましたw
じゃあ次はおちんちん挿れてぇ～って
おねだりポーズをとってもらおうかなぁ」
「誰がそんな事…！」

【時間停止】
【時間停止解除】
「⁉　え　何で　私　こんな……！」
自分でマンコとケツ穴がよく見えるポーズをとり静止している清水。
「うおぉー丸見え」
「えっろ！」
「じゃあ後はこの女好きにしてもらって大丈夫だから」
「⁉　お前何言って……！」
「今までちょっと喧嘩が強いからってイキってごめんなさいって土下座したら許してあげるけど？」
「……っ」
それだけはできないのか、俯いて言葉を詰まらせる清水。
「マジかよ……！」
「俺やりてぇ」
「俺も……！」
そんな清水の体に群がる男たち。
「やめろぉおおおお！」

「よし…じゃあ、まずは俺から…」
服を脱ぎ準備万端の男が彼女に近づく。
その時だった。
清水は素早く起き上がり、男から距離を取ろうとする。
まだあんな気力が残っていたのか。
あの女のタフさは本当に驚きだ。
このまま逃がすのも面倒なので、俺はアプリをいじると清水の動きを遅くする。
「なっ!? 体が…」
突然身体が思うように動かなくなった彼女に男のパンチが炸裂する。
「う…っぐう」
腹を殴られ、痛みで目を見開く清水。

男はそんな彼女を組み伏せると、抵抗できないよう
押さえつけると、いきり立ったちんぽを突き立てた。
「ひいっ!」
無理矢理の挿入に悲痛な声をあげる清水。
だが男はそんなことお構いなしにピストンを開始する。
「いっつ……!　ぎぃっ……やめっ　く……うぎっ!
ひいっ　くう……いたぁ　ぐぇっ!」
男と地面に挟まれた状態で犯され、苦悶の声をあげるが
男の動きは激しさを増すばかりである。

男はさらに深く挿入できるよう体を動かす。
それはいわゆる種付けプレスの体勢だった。
全力で覆いかぶされらて身動きできない彼女の体が
容赦なく蹂躙される。

えぐるように、奥までちんぽを突きこむと、男は清水に
顔を近づけて叫ぶ。
「オマエには右腕折られたことがあったからなあ！
その分、たっぷり中出ししてやるぜ！」
「やめろおおおおっ！」
びゅくっびゅくっびゅくびゅくびゅくっ！
その悲鳴も虚しく、男は膣内にたっぷりと射精した。

「ふう…はあ…　あの清水に中出しできるなんて最高だぜ」
男が射精を終え、彼女から離れると、今度は別の男が清水に近づいていった。
痛みを我慢し、立ち上がって逃げようとする彼女に次の男の足払いがきまる。
「おい…なに逃げようとしてんだよ。前、俺に『逃げるなんてクソダセェ』って言ったオマエがよ！」

男は這ってでも逃げようとしている清水に、後ろから
強引にちんぽを挿入する。
「いっ…ぎぃ…ッ！」
前の男に無理やりかき回された膣内がまだ痛むのだろう。
苦しそうな表情で行為に耐える清水。
「ひぃっ…いっ…たっ…　ぎいっ…！　ああっ！
くうっ…　いつっ…ぎあっ　ぐあっ…　ひぐうっ！」
あまりに激しい陵辱に清水の顔が歪む。

だが以前やられた恨みもあってか、男はその行為を
止める素振りなど微塵もない。
決して逃さないよう、片手で清水の腰を抱え込み、
えぐり込むようにちんぽを出し入れする。
「ぐうっ…くうっ…やめろぉ…ぎうっ」
耐えるのに必死な清水の声が周囲に響く。

そして、男は勢いをつけるとひときわ強く彼女に
腰を叩きつけた。
「ひいっ……いやあっ！　またっ……！」
清水の反応で、皆が察する。
男はイき、彼女の中に精液をブチ撒けたのだ。
「あ……ああ……ああ……」
戦闘のダメージと二度の乱暴な行為で、清水はもう
立ち上がることもできなくなっていた。
そんな彼女に残った男たちが殺到する。

そこからはもう酷いの一言だった。
マンコも尻も胸も口も…汚らしい男たちから、
ただただ性欲のはけ口に使われた。

手足の時間を停止してやったので逃げることはできない。
穴という穴に出され、全身粘液まみれにされ、男たちに
揺さぶられ続ける。

そんな清水の精液まみれでどろどろの口が何か言いたそうに
もごもごと動いている。
「ん？　どうしたの清水さん　何か言いたいことがあるの？」
「ケンカが…強いからって　ゴボッ　イ…イキって
ごめんなさい」
喉奥や鼻から精液を撒き散らしながら謝罪する。
「ギャハハハハ！謝ってる！」
「このままじゃ妊娠しちゃうもんなぁ」
「もうしてるんじゃねｗ」
「えぇー　俺まだパパにはなりたくねーんだけどｗ」
「誰の子供か分かんねーだろこれなら」
「おれケツにしか出してねーから俺じゃねーぞ」
「お前変態じゃねーかｗｗｗ」

必死で謝った清水を尻目に男たちはそれを無視して
犯し続ける。
俺もそれを止めない。
「いや　いやぁ　謝ったじゃない　なんでぇ」
「俺が謝ったとき、清水さんってどうしたか覚えてる？」
俺の言葉を聞いた途端目を見開いて固まる清水。
「そういう事　こいつらが飽きるまで付き合ってやってね
どんどん人が増えてるから、いつ終わるか分からないけど」

「ひっ　いやぁああ…んぐ」
「うるせぁなぁ」
清水の悲鳴は口に突っ込まれたチンポによって
かき消された。

これは本当にいつ終わるかわからないな。
「じゃあ、俺はこれで」
そう言うと俺は、公園の出口へ向かって歩きだした。
途中、男子学生の集団とすれ違う。
俺とは逆の…清水がいる方向に足早に駆けていく。
おそらく彼らもあの女に借りを返しにきた連中だろう。
因果応報。
そんな言葉を思いながら、俺は公園を離れた。

暫くして様子を見に公園へ戻る。
そこには…
穴という穴に枯れ枝や空き缶、たばこなどのゴミを突っ込まれ、
その隙間から汚らしい黄ばんだ粘度の高い精液を噴出しながら
白目を剥いて気を失っている清水が裸で転がされていた。
体中に痣があるところを見ると、これまで散々痛めつけてきた
やつらから仕返しをされたようだ。

「こんなことまでされて生きてるなんてさすがだなぁ
体、頑丈だよねぇｗ」
俺の言葉は聞こえてないようで、返事の代わりに尿道から
ちょろちょろと小便を垂れ流す。
ひっくり返って垂らした小便は、清水自身の体をさらに
汚していったのだった。

第七章

プールサイド 肉体改造

因縁の相手に大敗北を喫したという情報はあっという間に
周囲に知れ渡った。
その様子を収めた動画や画像も出回り、校内でも清水は
腫物を扱うような雰囲気で接されていた。

心配する者もいれば馬鹿にする者もいる。
そのどちらもが彼女を追い詰めているようで、見てわかる
ほどに清水はピリピリとしていた。
険しい顔でぶつぶつと独り言を言う清水に、誰も近づけない。

「あいつが邪魔しなければ……あんなことには……」

うわぁ、まだ懲りてないんだ。
恐ろしいなぁｗ
じゃあもうちょっとお仕置きしてやるか。

今からの授業は…体育でプールか。
丁度いい、さらに恥をかかせてやろう。
女子のプールの授業が始まり、準備運動が開始される。
女子たちの体が体操で揺れる様は見ていて飽きないが、
今は目的があるので我慢だ。

【時間停止】
プールサイドで、だるそうに準備体操をする清水。
俺はあらかじめ用意しておいた道具の入った鞄を
更衣室に取りに行くと、それを手に彼女に近づく。

そして、準備のために水着を脱がせる。
何度も同じようなシーンを見ている俺だが、やはり
みんなが水着を着ている中で、ひとり素っ裸で棒立ち
しているコイツを見るとバカっぽくて笑ってしまう。

そんな清水の側で鞄からアダルトグッズを取り出す。
マンコ、乳首にバイブやローターを固定しスイッチをいれる。
ケツににもアナルパールを差し込み、股間のバイブに当たる
ようにして腸内に刺激がいくようにセッティングした。
それだけではなく、今回は脇や股間に発毛剤を塗りたくる。

上手く行けば、こいつは脇や股間から毛をボーボーに生やしてプールサイドで晒し者になるはずだ。
そんなコイツの惨めな姿を想像し、発毛剤を塗りたくる手にも熱がはいる。
そして、俺がそんなことをしている間にも、清水の股間からは大量の愛液が流れ出はじめていた。
コイツ、本当に感じやすくなってるなw
さて。
棒立ちで間抜けに愛液を垂れ流す清水は見ていて面白いが発毛剤の効果がでるには、まだまだ時間がかかる。
折角なので、止まった時間の中でやってみたかったことでもやりまくって時間を潰すか。

とりあえず、
プールサイドで目についた、クラスのかわいい子たちの
身体を触ってみたりする。
それから、セクハラ教師を職員室で全裸にしてやったり、
後輩にパワハラをする運動部の先輩を蹴り飛ばしたり、
ムカつく同級生の家にお邪魔して最新ゲーム機を拝借し
百本近いゲームをトロコンまで遊び尽くしたりした。

あれから、どれくらいの時間が経っただろうか。
時計が正確に動いていないので、よくわからないが
時間を止めてからかなりの日数が経過したはずだ。
俺は本来の目的であった清水の元に戻り、水着を着せて
時間停止を解除する。

「ひぃあああああ！あっ♥　あっ♥　あっ♥」
「⁉」
「何⁉」
「清水さん⁉」
急に叫び声をあげた清水に皆の視線が集中する。
「おっ♥おっ♥おっ♥おほっ♥おっ♥おっ♥」
性感帯を玩具でめちゃくちゃに弄られた快感に翻弄され、
直立の体勢で目を見開いたまま、下品な喘ぎ声を上げる清水。
見ていると、乳首とクリがガチガチに勃起し、どんどん
大きくなっていく。
大きさは以前の3倍ほどになっただろうか。
遠くから見ても布を押し上げ異質な存在感を放っている。
脇や腕、足、股間部分の毛が生い茂り、股間部分は肥大した
クリトリスと生い茂った陰毛で水着が盛り上がり、見た目の
汚らしさがさらに上がっている。

「あひぃいいいぃぃぃい♥」
ひと際大きな悲鳴を上げると、潮を吹き、その場にへたり込む。
内股の格好でよだれや液まみれ…
汚らしい顔と体を晒し、しゃがみ込む清水には、みんなから
これまでの凛々しい彼女の印象を全て消し去るだけの力が
あったようだ。
周りから見れば急に漏らして錯乱したようにしか見えない
だろうしｗ
これまで清水に同情的だった女生徒もその様子にドン引き
しているようだ。
「…っ」
嫌悪感を浮かべ、冷たい目線を彼女に送るクラスメイトたち。
最高だ。

第八章

わからせ 謝罪要求

放課後。
清水の方から俺を呼び出してきたので、旧校舎裏の人気のない広場に向かう。
「私と1対1で勝負しろ　私が勝ったらそれを拡散してもらう」
「…良いけど　勝てる見込みはあるわけ？」
「今までは、私の体調不良の時や、別のやっと喧嘩をして体力が削られた後に仕掛けてきたり…と卑怯な方法で勝っただけ！万全の状態なら、あんたなんかに負けるわけがない」
「…はぁ、良いけどw」
負けを認めたくなくて、無い知能を絞り出して理由をつけたってわけだ。
まぁ、卑怯な手段を使ってるってのは当たってるんだけどね。
時間停止っていうチート能力だけど。

「死ね！」
言うが早いか俺の顔面目掛けてものすごい速さ、
重さの拳を突き出してくる。
本当に物騒な女だなぁ。
あらかじめアプリで動きを遅くしておかなかったら、
冗談抜きに殺されていたかもしれない。
そんな訳で、彼女の渾身の拳を難なく避けると
腹に一発入れてやった。
「うぶっ」
体がくの時に曲がり、下りてきた顔に一発入れる。
「ぶごっ」
何とか堪えてまた殴りかかろうと体勢を整える
この女の股間を思いっきり下から蹴り飛ばす。
「いぎっ」
情けない声を上げて前かがみになる清水。

「ちゃんと当ててくれないと…
俺が女の子虐めてるみたいになってるじゃんw」
ここぞとばかりに煽ると、怒りで我を忘れ、大ぶりの
パンチを打ってきた。
あーあ、だめだこいつw
「何それ　子供じゃないんだから、ぶんぶん腕を
振られてもねぇw
攻撃の当て方、教えてあげようか？w」
俺はその拳を軽く避け、素早く後ろに回りこんで
彼女のケツを蹴っ飛ばす。

「嘘だろ…何で　勝てないの…？」
「単純に弱いからでしょ」
こんなに頭に血が登って冷静さを欠いた清水なら、
俺の力でも簡単にねじ伏せられる。

「じゃあ、まあ…
これまで散々やられた分、体で返してもらおうかな
あんまり人を舐めてるとどんな目に逢うか、きっちり
教えてあげるよ」

「いや　いやぁあ」

これまでの清水からは考えられないような弱々しい
声を上げながら頭を振って逃げようとする。
そんな清水の手を取り、無理矢理人気のない旧校舎の
男子トイレに連れ込む。

トイレに入ると、俺は清水を裸に剥く。
当然激しく抵抗されたが、その動きもこちらから見れば
スローモーション。
抵抗虚しく、清水はいとも簡単に一糸まとわぬ姿になった。
ブラジャーとショーツの下に隠されていた、どす黒く大きな
乳輪と子供ちんちんサイズのクリトリスが露わになる。
「うわぁ…　清水さんの体って　なんていうか　汚いねぇ」
俺がやったにも関わらずしらばっくれて小ばかにしてやると、
顔を真っ赤にして睨みつけてくる。

「見て、この裸の画像…
これが普通の女の子の体なんだけど」
汚体にされる前の清水の裸画像、頭の部分をトリミングしてあるものを見せる。
「…だから何よ」

「それに比べてさぁ…」
心底あきれたという声を出しながら清水の体を撮影して、その画像を清水の眼前に突きつける。
「ほら見て清水さんの乳輪　汚すぎない？
こんな薄汚れてくすんだ胸の同級生いないよ？」
「ぐっ……！」

「でさぁ、マンコは真っ黒でしょ？
クリトリスも、もうこれチンポじゃんｗ
清水さん男よりに強いのが自慢だったっけ？
実は男だったんじゃないの？ｗ」
「～～～～～～～～～～～ッ！」

「ケツ穴も酷いよね～縦に割れて汚く膨らんでて」
さらに悪ふざけで、俺は自分のケツ穴を彼女に見せてやる。
「どう？　この清水さんのブサイクアナルに比べて、男の俺のケツの穴の方がきれいじゃない？ｗｗｗ」
「～～～～～～～～～～～～～～ッ!!」
最大級の屈辱だったようで、真っ赤になって震えてる清水。

「あーあ、清水さんの汚い体じゃチンポが反応しないよ
頑張って勃たせてもらわないと」
ため息をつきながらズボンをおろして清水に近づく。
「……ってことで、ケツ舐めてｗ」
「……え？　は……？？？」
「今まで散々いじめられてきてさ……
そのお返しに、何して貰おうかって考えたんだよ
最初は良くある『俺の靴を舐めろ！』みたいなのやろうと
思ったんだけどそんなことされてもつまらないし、全然
気持ち良くないでしょ？」
「それならもっと汚くて屈辱的な方がいいかなってｗ」
「舐めるわけないでしょ！　バカ！　死ね！　汚い！
やめろ！」
「チンポにキスしたり　色んな男に体中精液出されて
おしっこも漏らした清水さんよりは、俺のケツ穴の方が
まだキレイな気がするけどなぁｗ」
「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね！
殺す！　いつか絶対お前を殺してやる‼」
「ふうん　可愛くないなぁ」

俺はつかつかと清水に歩みよると、素早くその背後に
回り、首を絞める体勢にはいる。
「ぐえ　ごえ　ぐっ」
じたじたするも俺を振りほどけない清水。
呼吸ができなくなり、口をパクパク開けて必死で
酸素を求めている。
そんな彼女を締めたまま、地べたに引き下ろす。

準備ができたので時間を停止させる。
俺は彼女の口から、だらしなく伸びた舌を引きずり出し
上を向かせた。
そして、
その舌に向けて尻穴を近づけていく。

清水の伸ばした舌が俺のアナルに触れる。
俺はそのまま尻を突き出し、舌を穴の中に
ねじ込んだ。
ケツを前後左右に振って湿った暖かい舌で
中の気持ちいい所を何度も往復させる。
「うわぁ～～～思ったより気持ちいいなぁこれ
癖になりそうw」
ムカつく女の舌でケツ掃除をするのは、想像の
何倍も爽快だった。

時間停止解除。
「⁉ ん んぶっ」
「あ？ 目が覚めた？
首絞めたらすぐに落ちちゃったから勝手にやらせて
もらってるよ
失神って癖になるらしいから気を付けた方がいいん
じゃない？」
「⁉ ん んぶぅううう おえ んご」
逃げようとする清水にケツを押し付ける。
「やめてぇ もう おねがいいい」
ちんぽも勃ったし、涙声で懇願する清水に気分が
良くなり解放してやることにした。

向き直り、清水の体に触れる。
ビクンッと身体を震わせて動きが止まる。
「い……いや……」
股に手を突っ込みマンコをまさぐると
ぐちょぐちょという卑猥な音が鳴り響く。
「うわ　濡れてるし　え…何？
俺に絞められたり、ケツ舐めさせられて感じた？」
「そんな…なんで……私……」
「マゾなのｗ？」
「そんなことない……！」

「はいはい　じゃあ遠慮はいらないよね」
俺は清水のマンコに雑にちんぽを充てがうと、根元まで一気に貫いた。
「あああ　あっ　あっ」
深く突き入れられ子宮が刺激される。女の身体を揺すり、さらに奥まで肉棒で突き上げる。幾度となく乱暴に犯された体は、酷く扱われることで快感を得るようになってしまっていた。
「いや！！駄目　あっ♡」
ちんぽを根元まで挿入し、そしてカリの部分まで引き抜くという動作を激しく繰り返す。
「んんっんっ♡んっんっ♡んっ♡んンン～～…っ♡　ふぁぁぁ…♡」
意外に清水の喘ぐ声は可愛らしく、俺の興奮を煽る。

途絶えなく淫猥な結合音がトイレ内に響き渡る。
俺が容赦ない突き上げを食らわす度に、清水の乳房が跳ねる。
「ああ……う……だめ……んあああ……あ……あ……いや……ひゃ……ンっ！」
清水は首を振って快感を拒絶しようとするが、
まんこから愛液が噴水のように吹き出る。
クチュリとたっぷりに湿った膣ヒダが、俺のちんぽに
まとわり付き、内部が激しく蠢動する。
「も……♡　もうこれ以上は……♡　お願い……♡
もう……やめ……♡」
イキそうなのだろうが、俺にイカされるのは嫌なようで
必死で耐えている。
その態度が癪に障ったので、腰を掴んで乱暴に奥まで
ちんぽを突き入れてやった。
「んああぁぁぁ～～～っ⁉　ん～～～～～～っ！」
亀頭に硬い感触が当たる。　子宮口だ。
ぐぼっ……！
俺は容赦なく子宮口を亀頭で貫いてやる。
「ひああああああっ！」
子宮口が亀頭を包み込む。

尿道が子宮内部で射精してやろうとパクパクと開閉する。
「あひ♡あひぃいいいいいいいいいい♡」
膣内が痙攣して竿をぐにぐにうねうねと締め付けてくる。
その動きで、清水がイったのが分かった。
俺もそろそろイかせてもらうか。
下からさらに激しく腰を突き上げる。
「ひぃいいん」
ギリギリと悲鳴を上げながら蠢動する清水の
子宮のm中まで犯しつくす。
そして…
限界までちんぽを奥へ突き入れると
びゅぶッ　びゅるるるっ　びゅ～～～～っ
ぴゅっ　ぴゅぴゅっ
子宮に直接、俺の白濁液を大量に流し込んだ。
子宮口と膣がそれを外に逃すまいと奥へ奥へと
ごくごく飲み込む動きをしているのが分かる。

ぬぽん
今まで力でねじ伏せられてきた相手を完全征服した
達成感も相まり、あまりに気持ちいい射精だったので
足ががくがくと震えていた。
息も絶え絶えといった様子の清水に、これまでの
時間停止後の痴態を撮影した動画を見せつけてやる。
「どう？自分の事が客観視できた？
清水さんって弱いし汚いし、ちょっと力が強いくらいで
よくこれまで偉そうにしてこれたよね
心を入れ替えた方がいいんじゃない？」
「……ッ！」
この女……
ここまでされてもなお、まだ俺を睨みつけられるのか。
だがその表情は以前に比べると随分弱々しい。
もう一押しか。

【時間停止】
俺は時間を止め、清水を校門前に連れて行く。
校門前には下校中の生徒がちらほら見受けられた。
俺はそこで裸の彼女に鼻フックを施し、首から紐で《私は負けました》と書かれたプレートをかける。
私は負けました
その屈辱的な姿に加えて大股開きで、中出しされた汚らしいマンコとアナル、毛の生えた体を見せつけるポーズをとらせた。
【時間停止解除】
「きゃぁあああああああ！」
「何⁉」
「変態‼‼」
「いやぁあああああ」
突如現れた汚らしい変態女に皆驚いて悲鳴を上げる。

「清水さん⁉」
「え、負けたって…」
「誰かにやられてこんなことされたの⁉」
少し落ち着いてきたギャラリーたちが彼女が誰であるかに気づき、プレートの内容を読んで同情的な視線を送る。
裸を見られる恥辱、最強であった自分が負けたという屈辱で真っ赤になって震える清水。
だが、涙より先にフックによって開かれた鼻の穴からどろりと情けない鼻水が流れて滑稽な姿をさらしてしまう。
私は
負けました
ここまでやれば心が折れただろうか。
少しでも反省してくれているなら…
もう俺に暴力をふるう気がないのなら許してやってもいいかもな。
「ねぇ　俺を虐めてたの悪かったって思ってる?」
清水に問いかける。
すると彼女は…

『謝らなかった』　→ED1フォルダへ
『逆ギレしてきた』　→ED2フォルダへ
『素直に謝った』　→ED3フォルダへ

エンディング①

薬漬け快楽堕ち

「何であんたなんかに謝らないといけないのよ
どうせ変な手を使って勝ってるんでしょ!?
絶対いつかぶっ殺してやるから」
「…そう」
まぁ、変な手を使ってるっていうのは合ってるんだけど、
少しはいじめを反省してくれたら良かったのに。
仕方がない…
私は
負けました
「反省してくれないようだから、手加減なしで思いっきり
やることにするよ」
時間を止める。

私は
負け
ました
時間停止アプリの別機能を使って清水の意識を覚醒させる。
「……何⁉　何が起こって　体が……動かない⁉」
「うん　俺　時間が止められるんだよね
だから、もし今後清水さんが頑張って、どれだけ喧嘩が
強くなったとしても、俺には絶対かなわない……ってわけ」
「え？　何言って……
まさか、そんなことできるはずが……」

そこに取り出した注射器。
「さっき入れてみて思ったんだけどさ
清水さんマンコもケツ穴もガバガバのブスすぎて最低だよね
これ以上チンコ入れる気にもなんないから、これで気持ちよく
なっといてw」
彼女の眼前に注射器を突き付ける。
「え？　は？　何？まさか…クスリ？」
「そ」
「ヒッ　やめ…！」
「やめない」
暴力団の事務所からくすねてきた薬を
彼女の乳首、マンコ、
アナルに注入する。
私は負けました
「ひぃ　頭チカチカして　体　熱い　や　こわいいいぃぃいいい」
効果はさっそく現れたようで、焦点の合わない目をしながら
涎を垂らし、歯をカチカチと鳴らしながら震えだした。

「折角だからこれもプレゼントするよ」
大人のおもちゃと言われる様々な淫具を取り出す。
「だめ　今そんなの」
「で、今からまた清水さんの意識も時間と一緒に停止させるね」
言いながらマンコにバイブを突っ込む。
「ひあぁ♡」
「期間は…そうだな
1か月くらいにしようかな」
ケツにはアナルパール。
「んおっ♡」
「止まった時間の中で感じた快感は
時間が動き出した時、全部が一気に
くるから」
右乳首をローターで挟み込む。
「あはぁあああ♡」
「前みたいにまた酷い姿をみんなに見てもらえると思うから
楽しみにしておいて」
左乳首にもローターでサンドする。
「んんん♡ああ♡」

「それで　ああ♡　今まで　あんな　あはぁああ♡」
「そうそう　どんなに俺に逆らっても無駄
酷い目に逢うだけだって理解した?」
「やめて　あやまるから　あはぁ♡
あっ♡あ♡　あんなのいやぁあああああ♡」
「もう遅いよ　じゃあね」
そう告げると、彼女の意識を停止させる。
脅すために1ヶ月って言ったけど、そんなに待つのも面倒だ。
適当に数日放置して解除することにしよう。
さてどこで晒し物にしてやったら面白いかなぁ…。

大型ショッピングモールの前に大絶叫が木霊する。
ぎょっとして振り向く人々。
そこにはゴミ箱にケツから突っ込まれて暴れている少女がいた。
ケツが抜けず、ごみ箱から出られないようで足掻いている。
首には
《動画撮影中》と書かれたプレートが下げられていた。
周りの人たちは裸の清水に驚きながらも関わりたくないようだ。
あんな迷惑系の対処は店員に任せる…とばかりに、彼女へ軽蔑の
まなざしを向けると足早に遠ざかっていく。
「おっ　おっ　おお♡　おほぉおぉお♡」
下品な喘ぎ声を上げる上に全裸でバタバタと体を揺さぶる
女の姿を見せないよう、子連れの家族は慌てて引き返していく。
動画撮影中
事態を収集するべく店員が駆け寄る中、逆に興味本位で彼女に
近付いて撮影する人も出てきた。
この店は学校から近いので、うちの制服の生徒たちの姿も
ちらほら見える。
「あれって…」
「だよね、清水さんだよね」
「やば　何やってんのあの人」
「最近変だなって思ってたけど」
「やっぱ暴力ふるう人ってどこかおかしいんだよ」
「ねー　騙されてたっていうか…本性が分かったって感じ
だよねー」

彼女から遠巻きに人の輪ができるなか、これまで清水に力で
ねじ伏せられていた不良たちも仲間から連絡を聞きつけ
集まってきたようだ。
「うっわ　だっせｗｗｗ」
「くっさｗｗｗ　ゴミよりこいつの方が臭くねぇ？ｗｗｗ」
「ゴミ箱から出るくらいさっさとやれよｗｗｗ」
ここぞとばかりに清水を馬鹿にする。
やっとゴミ箱から出た彼女は虚ろな顔で地面を這いずる。
「おほぉおお♥　おおっ♥　おおん♥　おほぉおおおお♥♥」
時間停止中の快感に襲われ、床の上で絶頂する清水。
あまりに汚いイキ顔にゴミで薄汚れた体。
丸出しの股間からジャージャーどばどばと愛液を垂れ流し、
あたり一面にに撒き散らす、衆目環境での絶頂は本当に
無様で惨めったらしいものだった。
画撮影中
そして…
俺に逆らったらどうなるか脳筋の彼女にも理解できたのか、
それともそんな頭まで薬で壊れてしまったのかは知らないが、
この後、二度と清水が俺の前に現れることはなかった。
～END～

エンディング②

花壇埋め無様晒し

「あんたがキモくて弱いのが悪いんじゃない！
逆恨みでこんなことまでして
許さないから！
どんな手を使ってでもボコボコにしてやる‼」
逆切れされてしまった。
残念だ。
私は負けました
「良いよ、じゃあこっちももう手加減しないから」
時間を止める。

時間停止アプリの別機能を使って清水の意識を覚醒させる。
「…何　何が起こって　体が…動かない⁉」
「うん　俺　時間が止められるんだよね
だから、もし今後清水さんが頑張って、どれだけ喧嘩が
強くなったとしても、俺には絶対かなわない…ってわけ」
「え　冗談でしょ？　そんなことあるわけが…」
「俺の他に何も動かないでしょ　音もしないし」
「え…　嘘　そんな　まさか本当に…！」
「だから今からどんなに清水さんが叫ぼうが人は来ないし、
逃げるために動くことも出来ない」
「俺がここで君を刃物で刺したり、鈍器で殴っても誰も来ない」

「…っ」
静かな空間で、清水が恐怖からつばを飲み込む音が聞こえる。
「しかも、時間停止中に起こった感覚は後でまとめてくる
みたいだから…
経験者だからわかるでしょ？
痛いことをされたら一気にそれが襲ってきちゃう
もしかしたらショック死しちゃうかもね」
「やめて…　お願い　謝るから」
じょろじょろじょろじょろ～～～～
清水は恐怖に耐えきれ無かったようで、情けない顔をして
失禁していた。
「もう遅いよ
でもまぁ俺も別に清水さんを殺したいわけじゃないし
その点は安心して」
「…」
「でも、今までされたことの鬱憤は晴らさせてもらうよ
これまで以上にしっかり犯した後、晒し者にしてあげる」
「いやぁぁああああああ」
「じゃあ意識も停止させるから…
何をするかは時間が流れ出した時のお楽しみだねｗ」
「ごめんなさい！　あやまるから!!　ごめ…」
時間を停止する。

（え!?　真っ暗で　息ができない
何!?　何が起こっているの!?）

(何!?何なの!?地面…!?)
両足をバタつかせて抜け出そうと
もがく清水。
(口の中　ドロドロしたものが　臭い
にがい　苦しい　息　できない)

（胸　クリ　全部　触られて　いやぁ）
（!?　股に何か　入って　お尻も
ひいいいいいいい）
快感も相まってさらに激しく暴れだす。

そこへ登校してきた生徒たちが
尋常ではない事態に気づき、
慌てて助けに駆け寄ろうとする。
だが…

（いひっ　んぎもちいいいぃぃぃぃい）
体中を駆け巡る快感になすすべなく潮を吹く清水。
まるで噴水のようなそれに、近付いていた生徒たちが怯み、
一斉に足を止める。
（おほぉおおおおお　おほぉおおおおん）
マンコとケツ穴から潮、精液、愛液、腸液を撒き散らしながら
ぴくぴくと絶頂する清水。
さながら噴水のようだった。
「うわぁ……」
「きったな……」
その姿には助けようとしていた生徒たちもドン引きだ。

しかも
（苦し……息が……）
少ない酸素で苦しい中暴れまわったせいで酸欠を起こす。
（だめ……!!）
ジョ～～～ジョロロロロ
尿が撒き散らされ、清水自身の体をさらに汚していく。
ぶぶっ　ぶぅうう　ぶっ
ブリブリブリ　むりゅりゅりゅりゅ
ついにアナルからは大便までも漏れ出してしまった。

さすがにこうなってしまっては
もう誰も助けに行こうとする者はいない。
仕方ないなぁ。
「あーあー　肥料まで撒かなくてもｗｗｗ」
あざ笑いながら近づき、花壇から引き抜いてやる。

「ぶはっ　はーっ　はーっ」
せっかく掘り出してやったのに、清水は鼻や口に入った
泥を払い、酸素を吸うのに夢中だ。
「助けてやったんだからお礼くらい言えないわけ？」
声をかけるとようやく俺に気づいたようだ。
「ひぃいいいいいい！」

膀胱と腸内に残っていた尿や糞を恐怖で撒き散らしながら
後ずさる。
「もう　しゃからいませんから
ゆるしてくださしゃいいいいい」
清水はそう言うと、ブス顔で大号泣しながら気を失った。
どうやら心を折ることができたようだ。
これでこの女が今後俺に関わることはないだろう。
~END~

エンディング③

謝罪から交際へ

「悪かった…」
意外にも素直に謝ってきた。
「うん　分かればいいや　もう俺に関わってこないでね
あ　でも最後に　なんで俺だけ虐めてきたの？」
「…」
「何か　気になったっていうか」
「？」
「気が付いたらちょっかいかけてただけっていうか」
この女、あれで好意を持って接していたつもりだったのか。
「ボコられだしてからは…好きになっちゃったっていうか」
「!?」
脳味噌筋肉もここまでくると凄いな。
「付き合ってくれないか…　私　お前のことが…」
だが、悪い気はしない。
「んーまぁ　じゃあ試しに」
こうして俺たちは付き合うことになった。
私は
負けました

そして…
それから数日後。

「こんな格好……恥ずかしいんだけど」
「清水はすぐお漏らしするし　頭悪いし　子供からやり直した方がいいんだよ」
ここは人のいない夜の公園。
清水は髪をリボンのついたゴムで短いツインテールに結ばれ、
小さな子が着るような服を身に纏い、おむつを履かされていた。

「こんな格好見られたら人生終わっちゃうねぇｗ
警察に突き出されちゃうかもしれないしｗ」
「うう…もう　やめよ…」
「あ　あっちから人の声が！」
「‼」
「と思ったら気のせいだったｗ　ごめん」
「あ　あ　ああああ」
しょろしょろしょろしょろ～～～
おむつの中から水音が聞こえる。
清水はびっくりして失禁していたのだ。
俺に散々いたぶられ続けた結果、コイツは完全に腑抜けてしまった上に、時間停止調教によって下が緩くなっていた。
「ほら　また漏らしてるし」
「ううっ」

羞恥で半泣きになっている清水を公園の茂みに連れ込むと、
チンポを眼前に突きつける。
「♥♥♥　良い匂い……♥　早く　早く　しゃぶらせて……！」
それだけで涎を垂らしながらうっとりと鼻を鳴らす清水。
「清水はチンポが大好きだなぁ」
「大好き♥　お願い♥　我慢できない♥♥♥」
そう言いながら、ふごふごと鼻を鳴らしてチンポを嗅ぐ。
そこには最強だった頃の面影など微塵も残っておらず
鼻を広げてチンポをおねだりしている、ただの雌豚が
１匹いるだけだった。

「ぶっさいくな顔して必死でちんぽ嗅いで…仕方ないなぁ
どうぞ　舐めて良いよ」
「♥♥♥」
「ありがとうございましゅ　ちゅぽ　んむっ
どんなにちからが　むちゅ　ちゅむっ　つよくてもぉ、
おちんぽ様にはぁ　あはぁ♥　かないませんっ♥」
チンポへバキューム状態で吸い付き、舐めしごきながら、
俺のチンポへの服従を述べる清水。
征服感で満たされ、気分が上がる。

「従順な良い子の清水にご褒美を上げるよ」
言いながらおむつを外す。
アナルには極太アナルパールがねじ込まれていて
マンコはぐちょぐちょだ。

遠慮なくちんぽを突き入れる。
『ありがとうございましゅう♥♥♥』
チンポを入れられ舌っ足らずに賛辞を述べる。
「あ、あんっ……あ、あふぁっ……あ、な、何かくるうっ……！
あ、あっ、あんっ……あたしもう……ッ……だめぇ……
くふう！はぁ、はぁ、もうっ、もうっ、あうぅぅん！
あぁん！あひゃっ……あぁんっ……」
「かっ、かひぃ！　りゃめっ、あひっ、んひぃ！
んうぅぅう〜〜〜っ！　あうん、あうぅぅん！
ひぃいっ……はひっはひっ……すごい……♥」
深く突き入れられ子宮が刺激される。
奥まで一気に貫き子宮口まで到達させる。
今日はこっちを壊してやろう。
「ああっ　あっ　あうぅんあはぁ、あうぅぅん！　あっ！
あ　あんっ　あ　あふぁっ　ああっ　あんッ　だめぇ！」
身体を揺すり、さらに奥まで肉棒で突き上げると
ぐぶっ…と何かを貫いたような感触があった。
「ひぎいいぃいいあああああああ！」

亀頭が子宮口を突破する。
「ダメ　ひぎぃい　奥　こわいぃいい　来ちゃう
何か　ひぃいいい」
だがまだだ、もっと奥まで……！
「んぎ　んがあぁああああああああ」
俺が容赦ない突き上げを食らわす度に、不似合いな
女児向けの服から覗く清水の大きな胸が揺れる。
奥へ奥へと進むと肉のきしむ感覚がちんぽにまとわりつく。
「ひぃぎいい　あがあ　むりぃ　むりぃいいい」
内部が激しく蠢動する。
まんこから愛液が吹き出る。
限界まで突き入れ、亀頭の先に子宮口をひっかけ捩じり
ながらゆっくりと奥から外へとちんぽを引き抜く。

ずるり
「ひぎぃあああああああああああぁぁぁぁぁあああ！」
亀頭にまとわりついていた子宮が外界に連れ出される。
「はは　やったw」
「…ッ　ん…ッ」
ぴくぴくと体を震わせ、その場に倒れこむ清水。

「んああぁぁぁ～～～っ!?　ん～～～～～～～～っ!?」

だが、それで終わりではない。
俺は飛び出た子宮に手を添え、その口に再び挿入した。

「おおおぁおおおおお　んごおああおおおおおおお」

喘ぎというよりも咆哮を上げている清水を気遣うことなく握った子宮をオナホ代わりにちんぽをこしこしごく。

「んほぉおおおおおお」

彼女は乱れに乱れた後、体を殊更激しく震わせ、泡を吹き白目を剥きながら絶頂した。
子宮が絡みつき俺の腰に甘い痺れが走る。

「出すぞ……出す……くっ!!」
大量の射精が清水のまんこを満たし、そして子宮の内部へと
溢れていく。
はみ出た子宮を奥に向かってしごいて精液を奥に送り込む。
「あひっ　あへぇええ」
幸せそうに気を失う彼女が少しかわいく見えてきたので
ちゃんと付き合ってやっても良いかもしれない。
～END～

委員会
時間停止でわからせ

校庭に人だかりができている。
その中心には、一人佇む女生徒と、呻きながら地面に
横たわる数人の男たち。
「これに懲りたら、今後うちの学校の生徒に手を出そうと
思わないことね」
彼女の名は清水紗希(しみずさき)。
「この私にケンカを売るとか、頭悪すぎ」
自称最強女だが、実際に彼女に敵(かな)うものは
この地域一帯には存在しておらず、
近隣の素行の悪い連中で彼女を知らない者はいない。

何かトラブルがあるとその腕で黙らせてきた事に加え、
容姿やプロポーションの良さから、当校の生徒には
男女問わず皆に好かれている。
今回はうちの学校の女生徒にしつこく絡んでいた
半グレかぶれの他校生を懲(こ)らしめたらしい。
「さすが紗希ちゃん！」
「清水さんのおかげで助かったよー」
「５人相手でも余裕とか…すごいねぇ」
「ありがとう…！困ってたんだよー」
「ごめんね　危ないことさせて…」
喧嘩を見守っていた被害者であるところの女生徒達が、
口々に彼女にお礼を告げ、褒めたたえる。
「こんなのどうってことないよ　こいつらが弱すぎるだけだし」
それに対して屈託のない笑顔で応える。
こっそり見ていた男子生徒も、彼女の強さに加え
下世話な部分でも彼女を持ち上げていた。
「清水っていいよなぁ」
「つえーし顔も美人だし」
「しかもあの胸、あのケツｗ」
「なーｗ」
「やりてぇｗｗｗ」
だが、最強で正義感が強いイイ女…
というのは彼女の表の顔で、その本性は虫唾の走る
クソ女だった。

以前、俺がクラスメイトの女子連中に虐められていた時に
助けを求めたところ
「やられたくないなら強くなれば良いのよ
何なら特訓してあげようか」
といってきた。
それならば…と頼んだら、特訓なんて名ばかりで、
ただボコボコにぶん殴られ、倒れたところを足蹴にされた。
「虐められるのは、あんたに何か原因があるんじゃない？
ていうか
女の子にからかわれたぐらいで虐めなんて大げさな…
メンタルもフィジカルも弱すぎるでしょ
何か…あんたを見てると無性にイライラするのよね」
と突き放された。
それだけでなく、俺への虐めへ積極的に加担しだしたのだ。

清水が加わるまでは、この3人…
堤(つつみ)、山下、島村から受けていたいじめは
≪俺は負け犬です≫と書かれた紙を背中に貼られる、
横を通ると
「くさーい」とにやにや馬鹿にされる、何か話すと笑われる、
教科書等の物を隠される…等々、
今現在に比べれば程度が軽いものだった。

だが、清水が加わった途端、
一気に暴力方向へエスカレートしていった。
寒い日に冷水を頭から浴びせられ、着替えを隠されたり、
頭に袋をかぶせられ全裸に剥かれ、
複数人で殴る蹴るされたり。
辛くて泣いてしまったら、その顔を無理矢理笑顔に落書き
されてSNSに上げられたり、
≪弱くてごめんなさい≫踊りを踊らされ、動画投稿サイトに
上げられたり…。
挙げると切りがないほど
あの手この手で尊厳を破壊されていった。

もうだめだ…俺なんて…もう…
限界に達していたある日、
教室に入ることが出来ず保健室へ登校した俺は
ぼんやりとスマホを弄っていた。
すると…
…何だ？
アプデしていたアプリが見慣れないアイコンに…？
時間停止アプリ？
何でこんなものに…ウイルスとか？
変な場所触ったかな…。

確認のためアプリを適当にいじってみて気がつく。
さっきまで聞こえていた校庭の生徒たちの声が全くしない。
時間停止中
start
それどころか、周囲で聞こえていたあらゆる音が消えている。
これは一体…何が起こっているんだ？

違和感を覚え、保健室から出ると学校内を見回す。
止まってる？　外の景色も…人も？
全部止まってる…⁉
嘘だろ…こんな事が…
これ本当に…時間停止できる…とか？
スマホの画面で怪しく光るアプリと周りの光景を
交互に見つめる。

意を決して教室に向かうが、その道中でもやはり
動いているのは自分だけだった。
自分のクラスに着くと、見慣れた三人組を発見した。
堤(つつみ)、山下、島村だ。
楽しそうに何か話している様子のまま固まっている。
試しに堤のケツをぶっ叩いてみる。
反応はない。
残りの2人もケツをたたいたり鼻をつまんだり
頬をつねったりしてみたが無反応だ。
…。
ごくり、と喉が鳴る。

３人の中で一番胸がデカい堤に近づき、おそるおそる
服を脱がせる。
ブレザー、カーディガン、シャツ、ブラジャー…
次々と脱がせていくが上半身全て剥き終わっても反応は無い。
そのまま下半身も全てはぎ取る。
教室内で、素っ裸で棒立ちにされる堤。
さらけ出される、おっぱい、マンコ、ケツ…。
もう我慢できない。

試しに乳首をつまんでみる。
コリコリとした、それでいてクニュクニュとした
不思議な触感。
時間が止まっていても、石のように硬かったりは
しないんだな。
その事にほっとしながら、俺は想像に胸を膨らませる。
ということはきっと他の部分も…。

彼女の後ろに回り、大きな胸に触れる。
ふにっ　柔らかい感触が手に伝わる。
掌ごと埋もれてしまうほど張りのあるおっぱいを
こねるようにムギュッムギュッと揉んでいく。
ぐにぐにと手首を回しながら指で乳首をぷにゅぷにゅと
押し込む。
俺は次第に大胆になっていく。
ぐにぐにと揉みしだきながらも指と指の隙間ではさんだ
乳輪部分をキュッと摘まむとブルブルと震
えながらその中央にある乳首がさらに勃起してきた。
手の平全体で零れ落ちる肉をこね回しながら指の腹で
キュキュッと乳首を抓り上げる。

肌が汗をかき、俺の手に吸い付いてくる。
ふと視線を向けた先の堤の顔が上気してきている。
この状態でも感じるのか？
むしろ動き出したら…そんな疑問や恐怖が頭をよぎったが、
もう俺はこのシチュエーションに
ギンギンになっていた。
セックスなんてしたことのない童貞の俺に、この状況を
我慢できるはずもなく…。
少し様子を見たが、女も周りも動き出す気配はない。
もういいや…このまま犯してやる…！

俺は堤の腰を引き寄せグッと密着させるとそのまま
一気にちんぽを突き立てた。
夢中で膣の最奥に向かってチンポを叩きつけ、快感を貪る。
肉の壁による軽い抵抗感を抜けると今度は逆に
にゅるるっと吸い込むように膣襞が蠢き
勃起したチンポが奥へ奥へと誘われる。
彼女の身体は少し震えながらも静止したまま、
俺の激しい動きを受け入れている。

膣内を埋め尽くす肉の棒を挿し込まれたオマンコは
ぶるるるっと痙攣しながらさらに締め付けを強化してきた。
ゆっくりと引き抜こうとするとバキュームするように
肉が絡みついてきて再び内部へと引き込まれる。
このアプリ…もしかしてこういう行為をするために
作られたものなのでは…？
体が柔らかかったり、マンコが濡れたりと色々と都合が良い。
快楽に溺れながら、頭の片隅でそんなことを思う。
だが、そんな思考とは裏腹に、初めての挿入でちんぽに
与えられる快感によってそんな考えはかき消される。
マンコが中へ吸い込む力が働き
それがさらにピストン運動を加速させた。

すでにとても熱くなった膣内は次から次へと粘液質の汁が
溢れ始め、潤滑な動きをサポートしつつも肉襞が絡み付き
きゅうきゅうと締め付ける。
もうダメだ、出る……！
亀頭が膨れ上がった瞬間、ドクンッと熱い濁流が尿道口を
押し開いて噴出し彼女の膣内を白く汚していく。
ビュルル！ビュルーッ‼
びゅくっびゅくっ　びゅくびゅくっ　どぷっ
ビクビクとチンポが震えるたびに尿道に残ったザーメンが
勢いよく射出される。
相手の事など気にしない、俺が気持ちよくなるだけの射精。
それでいてオナニーとは違う、女を孕ませるための射精。
ごぼっ……ごぽっ……ごぽごぽっ
溢れた精液がいやらしく、汚らしい音をたてながら彼女の
股間から噴出する。

ふぅ…
一息ついて残りの2人に向き直る。
こいつらも犯してやる…！
見下して虐めていた相手に犯されるなんて、ざまぁない。

俺は山下の服を脱がせ後ろに回ると、マンコに乱暴に
チンポを突っ込んだ。
全く濡らしていなかったが俺のチンポは一度出した精液で
ヌルヌルだったのでスムーズに挿入することができた。
既に堤を犯してこの時間停止のおおよそを掴んでいた俺は
余計なことを考えず、ただ快感を得るために腰をふる。
その間も山下は俺を馬鹿にしたあの時の薄ら笑いと同じ
笑みを浮かべながら無抵抗で俺に犯されている。
そんな彼女の膣内に精液をブチまけると、俺の中で山下は
もうどうでもいい女になっていた。

残った島村はさらに雑に扱ってやった。
正真正銘オナホ扱いだ。
腰を持ってマンコの中身が気持ちいい角度になるように調整して、俺のチンポに押し付ける。
顔も見ずに、ガシガシとこの女の身体を自慰する道具として使う。
そんな島村オナホに中出しをした後には、コイツは俺の中で取るに足らない存在になっていた。
今後この女にどんな罵詈雑言を言われようが、気にも留めないだろう。

3人に対しキンタマの中身を全部吐き出すほど
膣内射精をした後、俺は彼女たちを元の場所に立たせる。
そして、自分の席に座り時間停止を解除した。

「ひゃあああああああ♥
ああああああああああああああへぇえええ♥」
「あ♥あ♥あ♥あ♥あ♥あ♥
あああああああああああああああ♥」
「あああ♥　あ♥　あ♥　ひぃあ♥　あひぃ♥
あへぇえええ♥」
愛液や小便をまき散らし、何度も何度も絶頂する彼女達。
そして最後は意識を失い、その水たまりに倒れ込んだ。
その姿を呆然と見つめていた俺は、ようやく我に返る。
この時間停止、解除したとたんに停止中の感覚が一気に
押し寄せるのか⁉
これなら…これを使えば…！
最強だろうが何だろうが関係ない、あの女…清水紗希に
最高の仕返しができる…‼

第一章

教室で時間停止

あいつら3人への復讐は済んだ。
しかし清水だけは簡単に許す気にならない。
さて、どうしてやろう……。

2時間目の現国の授業中、暴力女こと清水は
机に突っ伏して眠っていた。
それを見た教師が彼女の頭を丸めた教科書で叩く。

「いったぁ　何すんだよ」

「授業中に寝るな　読め　24Pの頭から」

「はぁい」

ふてくされた様子で立ち上がり、めんどくさそうに
教科書を開く。
くすくすという笑い声や、ばーかなど囃(はや)し立てる声が
教室のあちらこちらから聞こえてくる。

それのどれもが好意に満ちていて、清水の好感度の高さ、
いうなればクラスの愛されキャラである事を感じさせられ
反吐が出そうだった。

皆の注目が集まった丁度良いタイミングなので、
時間を止めてみる。
世界から音が消え、だれも微動だにしなくなる。
今朝と同じだ。
清水の目の前で手をひらひらと降ってみたが
瞬き一つしない。

カーディガンとシャツをたくし上げると大きなおっぱいがまろび出た。
意外にもこの暴力女、髪や首筋から良い臭いがしていて興奮してくる。

後ろから抱き着いてブラジャーをはぎ取り、
がむしゃらに胸を揉みしだくと、柔らかなおっぱいに指が沈み込む。

抱えるとたぷたぷと弾む胸の感触や、肉厚なおっぱいのみっちり感を楽しみながら
徐々に中央に向けて手を進める。
だが、本来ならあるはずの感触が指に当たらない。

不思議に思い正面に回ると、でかいピンク色の乳輪が目に
飛び込んでくるが、あるはずの位置に乳頭が見当たらない。
控えめに膨らんだ乳輪の中央、本来乳首があるべき位置には
小さな切れ込みのように見える一筋があるのみだった。
俗に言う陥没乳首というやつか。

初めて見るそれに興味を惹かれ、乳輪部分をつまんで
外側から押したり撫でたりとマッサージしてみる。
すると何か固い芯のような物が感じられるように
なってきた。
乳輪の中で乳頭が勃起しだしたのだ。
清水の体が熱くなり、汗ばんでいく。

さらに弄っていくと…
プルン
突端が頭を出した。
出てきた乳首を指で摘まむ。
指で転がすとむくむくと大きく固くなる。

ここ数日試してみて分かったことだが、俺の触れる物は
少しだけ俺の時間の流れの影響を受けるらしい。
どうやら乳首がかなり弱いようだ。
ブルブルと震え、顔は真っ赤に上気している。

乳輪ごと強くつねり引っ張るような動きをしつつ、右の乳首を舐めしゃぶり、吸い付く。
ちゅうちゅうと音を立てて吸っていると、逆側が物欲しそうに震えているのが分かる。
片方だけ完全に勃起し、もう片方は隠れたままというアンバランスな状態がおかしくなってきて、そのまま放置することにした。

暴力女の膝を曲げ床につけると、俺はズボンから
ちんぽを取り出し胸に挟んだ。
清水の口を乱暴に開いて首を下に向けさせて、
よだれを胸に送り込む。
潤滑剤の代わりだ。

間抜け面でぽかんと開けた口からよだれを垂らし、
俺のちんぽを胸に挟んでいる姿は滑稽だった。
女の両胸を胸を掴むように固定すると、乳圧が
ちんぽをみっちりと包み込む。

竿全体を包み込んだ乳房はぐにゃりぐにゅぐにゅと
いやらしく形を変えながら心地良い愛撫を続けてきた。
気持ちいい。
刺激もさることながら、このムカつく女の胸を蹂躙して
いるという思いが、俺の快感を更に加速させる。

おれはがむしゃらに腰を振った。
時折乳頭が露出している右の乳首だけを刺激して
やりながら何度も何度も腰を前後させる。
柔らかいおっぱいの中にみちみちと挟まれ、ぬるぬると
刺激されてどんどん精液がせり上がってくる。
ドロリとした熱い塊が尿道を押し開きながらその出口まで
一気に走り出していく。

俺は清水の胸からチンポを引き抜くと、間抜けに大きく
開けられた口の中に向かって射精した。
びゅくっびゅくっびゅるるるっびゅっびゅっ
自分でも引いてしまうような量と粘度の精液が
この女の口へと放出される。

「ふぅ……」
満足した俺は、床に座らせていた清水を元の机の位置に
立たせた。
その上で彼女を改めてよく観察する。
口に入りきらなかった精液が首を伝い、空いた胸元から
ダラダラと流れていく。
その液体は両房の谷間を経由し、腹を伝い、そのまま
スカートのウエストベルトあたりに溜まっていく。

「⁉ にがい…⁉ 何このにおい…
ぐっ ごぼっ げほっ ごほっ」
口と鼻から精液を噴き出す。

「清水⁉」
何が起こったのか分からないといった様子で、
教師が声をかける。
「な、何だ⁉　ぶごっ　げほっ　ごほっ　えっ
ゲホッ　ゴホゴホッ」
慌てて顔を手や服の裾で拭うものだから、顔も
カーディガンも俺の精液まみれになってしまう。

「んあっ　あっ　ん　あっ」
鼻水を垂れながら精液を吐き出し、喘ぎだす。
その様相はいつもの清水からは考えられない、
情けない姿だった。
「くそ…っ　何なんだよ…っ　くぅっ」
だが、そこは清水。
曲がりなりにも自称最強の女。
何が起こったか分からないながらも、これ以上の
醜態を晒すまいと耐えようとする。

しかし…
「はぁ⁉何だ⁉　えっ　あっ　ぬるぬるする
あっ　あっ　ん♡　あああぁあっ♡」
快感と不快感が交互に襲ってきて耐えきれない。
「えっ　あっ　あん♡　あっ♡　あッ♡　嘘　何
いや　あああぁあっ♡」
右乳首を執拗に責めた分の感覚も襲ってきたようだ。
びくびくと体を震わせ絶頂する清水。
だらしない顔を晒し、よだれを垂らして虚空を見つめる。
こいつ胸だけでイキやがったｗｗｗ
「おい！
どうしたんだ⁉」
何が起こったのか分からないといった様子で、教師が
声をかける。
「保健委員、清水を保健室へ連れて行ってやりなさい」
教師に言われ
「はい」
俺は彼女を連れて教室を出た。

第二章

保健室 自慰観察

保健室に着くと、清水は俺をにらみつけると
「とっとと出て行けよ　クソが」
と、いつもの調子で凄んできた。
「ああ　うん」
苛ついたが、何か違和感を感じて彼女をよく観察する。
すると左胸をやたら気にしているようだ。
（へぇ…）

ここはおとなしく退散したふりをして様子を見てみよう。
保健室を出て少し時間をつぶし、こっそりと戻る。

「あっ♡　ん……!?」
スマホを向ける俺が突然現れたことに驚いた清水が目を見開く。
「てめぇ　何やって……！」
殴りかかってきたので再度時間を止め、それを躱す。

ついでにベッドへ彼女を戻すと、スカートと下着をはぎ取り
足を開いて座らせる。
「うわ…」
思わず声が出る。
この女のクリトリスが予想以上にデカかったからだ。
勃起したそれは俺の親指ほどはあるだろうか。
陰毛も生い茂り、マンコはびちょぬれで、しかも陥没乳首とは。
この女、人のこと散々見下してたけど服の下にはこんな
残念でエロい体を隠してやがったんだなぁw

オナニーによって勃起している左乳首をさらに引っ張り、
でかクリをシコシコとしごいてやると、ぴっちりと
閉じたマンコから、濃厚な愛液がだらだらと垂れてくる。

その上でクリトリスをすりすりと指の腹で撫でてやると
ぷしゅっ
清水の体はさらに汗ばみ、股間から潮が噴き出した。
こいつの体、弱点だらけじゃねーかw

服を戻し、時間停止を解除する。
「よこせぇあはぁあ♡」
清水はスマホを奪い取ろうと掴みかかったつもりだったのだが、体が想定外の体勢になことに面食らって喘ぎながらこけてしまい床に突っ伏す。
「あはぁああ♡　ああああん♡」
そのまま俺の目の前で、体を震わせ絶頂した。
愛液が下着を貫通しスカートにまで滲み、染みを作る。

イった余韻でぴくぴくと情けなく体を震わせる
清水の目の前にオナニー画像と、でかクリ、
丸出しマンコ画像を見せる。
「この画像、消して欲しかったら放課後旧校舎裏に来てよ」
声をかけると保健室を出て行った。

第三章

旧校舎裏 決闘

放課後。
清水は憤怒の形相を浮かべながら旧校舎裏にやってきた。

「絶対に許さない　ぶっ殺してやる」

「うわぁ　こわいなぁ
でも、万が一俺が清水さんに勝てたら、これまでのこと全部謝ってくれる？」

「はぁあああ？」

顔いっぱいにさらなる怒りを乗せて俺に凄んでくる。

「殺されたいみたいだな！」

言いながら俺との距離を最速で詰めて殴りかかってきた。

時間を止める。

「おーおー　こわぁ　躊躇（まよ）いなしで顔面狙ってきてるじゃん
人としてどーなの　この女」
時間を止めていなかったら、その拳は確実に俺の顔に
ヒットしていただろう。

止まった時間の中、殴ろうとしてきている清水の顔に一発ビンタを入れ、後ろに回ってケツをぶっ叩き、その後全力で脛(すね)を蹴り飛ばす。

清水を足で転がし仰向けにさせる。
いいザマだ。
コイツは自分に何が起こったか、まだ全然分かっていない。

潰れたカエルのような惨めなポーズの清水の腹を踏む。
ひとまずこれくらいでいいか。

時間停止解除。
「ぐはっ」
痛みと視界の回転で何が起こったのか理解できていない清水。
それを上から覗き込み罵倒する。
「よっわ！　急にこけるからびっくりしたわｗ　大丈夫～？」

「ぐっ　くっそ！」
怒った清水は俺から距離を転がって取ろうとする素振りを
見せるがそうはさせない。
再び時間を止める。
スカートの下には露になった下着が覗く。
またオマエの好きなところをいじってやるよ。
俺は止まった時間の中で抵抗できない彼女の股間を
土足でこする。

次第に下着に染みが出来てきた。
足を離すと下着の股部分が小さく盛り上がっている。
こいつ、足でこすられて感じた上にクリトリスもフル勃起
させてやがるw
何とも間抜けな姿に笑いが込み上げてくる。

俺は彼女のそんな惨めで無様な様子を何枚か撮影し、最後に
ダメ押しとばかりに腹を数発追加で踏んでから時間を戻す。

「かはっ！　はっ　はあっ！
なっ⁉
なんでっ！　かはっ！」
何が起こったか分からず、腹の痛みに苦しむ清水。

「んっ⁉
んんっ！
あっ　ああん　んっ　くうっ…！
いっ　ぐうう」
股間に襲ってくる快感と腹を踏まれた痛みとで悶絶する清水。
「清水さん弱くなった？動き遅くなってない？」
「そんな　そんなわけ…　…クソが！」

まだ心が折れていないのか。
俺は半ば呆れつつ、また時間を止めて彼女の体を抱え起こすと後ろから首を絞める。

しばらく絞め続けると、顔色が悪くなり口角から泡を吹き始めた。
こんなもんかな。
腕を緩め、時間停止を解除する。

「ぐるじ…　ぐっ　いづの間に　ぐえ」
気付かぬうちにこの体勢になってしまっていては、さすがに振りほどけない。
清水は濁った声を上げながら締め落とされ、意識を失った。

いつもの彼女からは想像もつかない無様な姿。
これはあとでコイツに見せつけてやらないといけないな。
そう思った俺はパンツ丸出しで舌を垂らして泡を吹く清水を撮影した。

「起きろ」
撮影を終えた俺は、ぺちぺちと顔をたたいて彼女を起こす。
「ん…あ…」
「俺なんかに締め落とされちゃうとか　笑えるんだけど
何かおしっこも少し漏れてない？w」
「え…」
言われて朦朧とした意識の中自分の下半身に目をやる清水。

視界に飛び込んでくる、愛液と締め落とされたときに少し漏らしてしまった尿で染みのできた丸出しのショーツ。股に感じる布が微かに貼りつく不快感。
「俺なんかに負けた気分はどう？ｗｗｗ」
煽りながら先ほどの画像を眼前に突きつけてやる。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ」
顔を真っ赤にして睨みつけてくる清水。
「これに懲りたら、もう俺に関わるのやめてよね」
そう言って踵を返しその場を離れようとする。
……が、
その時、清水が素早く起き上がる気配を感じた。

嫌な予感がしてとっさに時間を止める。
振り返ると置いてあった角材を、俺めがけて
振り下ろそうとする清水の姿があった。

「あっぶねぇ…」

角材を奪い、遠くに放り投げてから停止を解除する。

「えっ　あれ？」
握っていたはずの角材の感触が消え、無くなっていることに驚いている清水に向き直る。

「勝てないからって武器を使うんだ
清水さんって本当に最低だね　卑怯者　クズ　死ねよ」
「…ッッ！」
痛いところを突かれたのか言葉に詰まる清水を無視して
その場から退散した。
あの女は本当に…
とことん心を折ってやらないとダメみたいだな。

第四章

雑魚にボコらせる

清水を痛い目に合わせる最高のタイミングはないものか
と考えていたある日、
清水が他校の不良グループ3人組に因縁をつけられてる
場面に遭遇した。

人気のない場所で、喧嘩が始まる。
男たちは最初は一人づつ清水にかかっていったが、
あまりに彼女が強いので、3人がかりで攻撃し始めた。

「はっ　卑怯者　1人で喧嘩も出来ないんだ　だっさぁ」
「うるせえ！」
煽られた男たちの怒りのボルテージが頂点に達し、清水が
その隙をついて反撃。
腹を殴られ地面に転がる男。
あっけにとられるもう一人を蹴り飛ばし、さらに後ろから
襲ってきた相手は裏拳で顔をつぶす。
3人を地面に転がし、呆れたような表情をしている清水。

「弱すぎでしょ　パンチの当て方、教えてあげようか？」
良い気になって、嘲るような笑顔を浮かべながら男たちを
さらに煽っている。
よろよろと立ち上がりながら、怒りに任せて殴りかかる
男たち。
だが、あんな動きでは彼女を捉えることはできないだろう。

そこで時間を止める。
清水なら難なく避けられるであろう攻撃。
だがその軌道上に彼女の顔面を置く。
もう一人の男をしゃがませ、清水の股間に拳が当たるよう移動させる。
もう一人の拳はボディがいいかな。
そうやって男たちのパンチが命中するようお膳立てした俺は
その場を離れ、時間停止を解除した。

「ごぼっ!?　ぶうっ！
ごえっ！」

清水は顔面、腹、股間を同時にぶん殴られ地面に突っ伏す。
殴っていた男たちにとっても、気づいたら清水に拳が
当たっていたので目を白黒させて驚いている。
が、醜い声を上げて憎たらしい女が地面で顔面腹股間を
交互にさすりながら転げまわっている姿を見て、すぐに
細かいことを考えるのをやめ、蹴りで追撃を入れながら
罵りだす。
「パンチの当て方教えてあげようか？キリッ　じゃねーだろ」
「よえーのはおめーじゃねーか　ギャハハハ」
「オラ！オラ！死ね！」
自分より遥かに弱い相手に不意を突かれて劣勢になった
ことがよほど悔しいのか酷く顔をゆがませて唇を噛んで
耐えている。
せっかくだからここで犯してやるか。

時間停止。
俺は清水に近付くと四つん這いにさせ、ショーツを剥ぎ取る。

指でぴっちりと閉じた縦筋マンコを開くとその中にうっすら
膜があるのが見えた。
へぇ、処女か。
まぁこんな暴力女とセックスできる奴なんていないよな。
折角だからこいつの処女はもっと悲惨な場所で奪うとするか。

じゃあとりあえずこっちだな。
後ろのピンクの窄まりを親指で開く。
ぎゅうぎゅうに閉じたそこは指すらきつくて入れるのに難儀した。
だが俺はこんなこともあろうかと、持ってきていたローションを
取り出し、清水のケツ穴にぶっかける。

無理矢理2本指を入れ、めちゃくちゃにかき回し、拡げる。
暫く強引にいじっていると多少はほぐれてきた。
これなら、そろそろいけそうだ。

ちんぽを清水のアナルにあてがい、強引に先端を挿し込む。
さすがにこの大きさのものはそう簡単には入っていかず、
亀頭を押し付け、ぐりぐりと動かしながらねじ込んだ

やがてカリの部分まで入りきり、ローションの滑りもあって
何とか動くことができるようになった。
清水は体全体、特に胸元にぐっしょりと汗をかき、鳥肌を
立てている。
内臓に異物が入ることに体が反応しているのだろうか。

腸内は激しい伸縮を繰り返し、俺を押し出そうと外へ外へ蠢く。
それを無視して奥へと突き入れ、最奥まで到達したら、ことさら
ゆっくりギリギリまで外へ抜き出す。
何度も繰り返すうちに、結合部分のローションが白く濁り
足と足の間で糸を引く。
単調な腰の動きに時々、違う方向への突きを加える。
突き入れるごとに飛沫のような粘液が吹き出す。

挿入しながらクリをいじったりすると、きゅきゅっとアナルが
収縮し心地よい。
それに気を良くした俺は、今度は清水の乳輪を探し出すと、
外側から円をなぞるように刺激して、陥没している乳頭を
乳輪内部で軽く勃起させた。
勃起したその芯を乳輪上からしこしことしごいてさらに
勃起させ、乳輪の左右から潰すように押すと、ついに内部から
乳頭が飛び出してくる。
それを刺激し始めると、効果はてきめんだった。
腸内が痙攣し、マンコから卵白のようなドロドロとした愛液が
溢れ出してくる。
止まった時間の中、俺たちの体のぶつかり合う音と、厭らしい
水音だけが辺りを満たす。
身体の奥の奥までちんぽを押し込むと、中がこれまで以上に
熱く強く蠢くのが分かる。
どうやら乳首とアナルへの刺激で何度かイっているようだ。

「もう……イク!!」
びゅっびゅっ　びゅびゅーびゅーびゅるびゅるびゅる
アナルの最奥に向けて大量に精を解き放つ。

「はぁ～　出たぁ」
一息つくと別の物ももよおしてきた。
尿意である。
丁度いい、このまま女を文字通り便器替わりにしてやろう。
しぃいいいいいいいいい
じょろろじょろじょろ　じょろっ　じょっ
そのまま小便を腸内に放つ。

すべて出し切った後、ずるりとちんぽを引き抜くと
清水のアナルは赤く充血していた。
太いものを咥えこんでいたせいか、その穴は半開きに
なっている。
俺は記念にその姿を撮影したのち、清水に下着を履かせ
土下座状態の体勢をとらせた。
男たちも時間停止前に清水を蹴っていた位置に戻す。
そして、4人から離れた位置に移動すると時間停止を
解除した。

「ひっ　痛い　痛い痛い　いやぁああああ」
清水からいつもとは違う甲高い声が上がる。
明らかに涙声だ。
男たちは自分たちの蹴りで清水が泣きわめきだしたのだと
勘違いしてますます良い気になっている。
清水はケツを押さえている所からみても、俺に無理矢理腸内に
ちんぽをねじ込まれた痛みに襲われているだけなんだろうけど。
殴る蹴るの外的な痛みには強くても、内臓を抉られる感覚は
初めてだもんなぁ。

「いたいよう　いたいいいい　いやぁ　いたいいい
やめてぇえ」
涙鼻水を浮かべてブス顔で大号泣している。
男たちは蹴りながら清水に罵声を浴びせる。
「いい気味だ」
「これからは　ちょーし乗んなよ」
「死ね　ブス！」
低レベルな暴言にすら、清水は返す余裕がない。

痛みに引き続き、大量の快感も襲ってくる。
「あひ　おほ　おっ　おおん　あっ　ああっ
ああ　おほぉ　おお　おおん」
気の強い女はアナルが弱いって典型だな。
初めてのくせにめちゃくちゃ感じてんじゃねーかw
やばぁw

しかも
「ひぃい　おほぉおおおん　おおん」
尻から俺の精液と小便が噴き出しみるみる下着を汚す。
痛み、異物感、快感、違和感のすべてが一気に押し寄せ、
体中から液を噴出させて大きく吠える。
「うわ、こいつ漏らしやがった」
「ぎゃははははは　マジかよ」
「きったねぇなぁｗｗｗ」
傍から見ると、あの清水が蹴られて大泣きしながら
おしっこを漏らして土下座しているようにしか見えない。
「やめてぇええ　おほぉおおおおおお」
この動画を清水に見せるのが楽しみだなぁｗ
「ぎゃははははは」
「俺ら清水やったとかヤバくね⁉ｗ」
「証拠に記念撮影しとくかｗｗｗ」
……。
これ以上こんな雑魚３人を良い気分にさせるのも癪だし、
このあたりにしておくか。

時間を止めて、清水に近づく。
どうやら苦痛や快楽を一気に味わったせいで気絶して
しまっているようだ。
そんな惨めな彼女を、男たちから遠く離れた木陰に隠すと
時間停止を解除する。
そのうち目を覚ますだろう。
俺はそこに清水を放置して、そのまま帰宅した。

第五章

教室で衆目羞恥

翌日。
登校し教室に入る。
「……!!」
と、清水が俺に殴りかかってきた。
いつもなら陰で暴力をふるう清水が、クラスメイトが見て
いるにもかかわらず襲い掛かってくるとは予想外だった。

こいつの評判を落とすチャンス、
どうせ後からやり返せるし……と甘んじてその攻撃を顔面に受ける。

「いってぇえええ」

床に転がる俺を見て満足げな清水。

「どうしたの紗希ちゃん⁉」

クラスの清水と仲が良い女子生徒が驚いて声を上げる。
清水は他の人間から見れば自分より弱いものに暴力を振るわず、困った人を助けるために力を使う正義感の強い人間ということになっているもんな。
俺みたいなひ弱な底辺を殴ったら、そりゃあ驚かれるだろう。

「こいつ、私のこと隠し撮りしてたから…！」
「⁉」
周囲の女子たちが軽蔑の視線を俺に送りながら口々に非難してくる。
「嘘　サイテー」
「キモ　こっち見ないでよ」
「やば…他の人も撮ってるんじゃない？」
「そんなことしてない…」
「じゃあスマホの中見せてよ！」
「…」
こいつ…脳筋のくせに悪知恵だけは働くんだな。
こうやって公の場で俺の立場と逃げ場を無くしてデータを消させようってわけだ。
時間を停止し、スマホの中の清水のデータを別の場所に移しフォルダの該当データを消去する。
「ほら…」
清水に手渡し、女生徒と一緒に中を確認させる。
「⁉　どこかに隠してるんでしょ⁉」
「…勘違いじゃない？　酷いよ清水さん」
「紗希ちゃん…？」

「みんな、こんなキモくて何考えてるか分からないような奴と
いつもあなた達を助けてあげてる私、どっちを信じるのよ……！」
「え……」
「そんな言い方なくない？」
「清水さんどうしちゃったの……？」
周囲の反応を見てしまったという顔をする清水。
繰り返すが、清水は自分より弱い者の味方、困った人を助ける
ために力を使う正義感の強い人間ということになっている。
それが、俺のようなクラスの底辺を見下す発言をして、かつ
お前たちを助けてやっているという驕(おご)った発言をして
しまったのだ。
「……」
女子たちはこういう事に対して敏感だ。
最近流れている清水の敗北の噂も相まって、おそらく彼女の
評価は少し悪い方に変わってきているだろう。
「違う　今のは　誤解だ！」
ざまぁない。
だが殴られた分と俺をハメようとした分はきっちり返させて
もらおうかな。

俺は再び時間を停止した。
教室内、
ほかの生徒が俺と清水に注目している中で下半身を
全て脱がし、大きく股を開いた姿勢をとらせる。

自分の行為を棚に上げて俺が悪いと言っているコイツを
見ていると、虐められるのは自分の責任と言われたことを
思い出して嫌な気分になったので、下着を頭に被せてやる。
「ぶぶっｗｗｗ」
真剣な顔をして自分のパンツをかぶるコイツの姿は
最高に間抜けだ。

ぴっちりと閉じていたマン肉を開くと、甘酸っぱい
エロい匂いに加え、こいつには似合わない女特有の
甘い良い匂いが漂ってきた。
俺なんかにちんぽを入れられるなんて、この女に
とっては相当屈辱に違いない。
そう思うと気分が高揚し、ちんぽが熱を持つ。

清水から服をはぎ取ると、マンコにちんぽを押し付ける。
ちゅむ
水音を立ててちんぽがめり込んでいく。

かなりキツいが清水の体に配慮することなく
どんどん腰を進めていると、何かが亀頭の先に
引っかかる感触があった。
これが処女膜かな？

時間が止まっている清水には知る由もないが、今まさに
処女が奪われようとしていた。
そう、この女が大嫌いな俺によって。
無抵抗のまま、みんながいる教室で、自分のパンツを被って
見下していた男に奪われる…
それがコイツの処女喪失にふさわしい。

ちんぽをギリギリまで引き抜き、一気に腰を突き入れる。
ぶつり
皮のようなものを引きちぎった感触がちんぽに伝わる。
「おめでとう、これで清水さんは中古マンコだよ」
そう言って、さらに奥まで一気に貫く。
「これ、ぜんぜん濡らしてやってないし、めちゃくちゃ痛いんだろうなぁｗｗｗ」

肉棒の先に、吸い付くようなまとわり付くような
キツい粘膜の感触を感じる。
強引な送出が快楽中枢を強制的に刺激し、脳が痺れる
ほど気持ちいい。
俺は清水の腕を掴み、力任せに引き寄せ、さらに奥を
蹂躙しようと一心不乱に腰を振った。

ちゅっ　ちゅくっ　ちゅむっ　ちゅぶっ
愛液が泡立ちあたりに結合部分からいやらしい音が
漏れ続ける。

濡れそぼった清水の膣内をちんぽでかき回す。
コイツも感じているのだろうか。
暖かい膣は激しく収縮しながら俺のモノに絡みつき
吸い付いてくる。
体を鍛えているからだろうか。
清水のまんこはなかなかの名器のようだ。

感触を楽しみながら腰を振っていると、膣がさらに
ぎゅっと締まり、俺のちんぽを絞り上げはじめる。
清水もイきそうなのだろう。
結合部から溢れる水音の粘着性が増していく。
「よし……いくぞ……いく……ッ！」
心地よい痺れがちんぽに集まってくる。
ちんぽから迸る液体を一滴残らず、膣内の奥深くまで
ものすごい勢いで流しこむ。
子宮を俺の精液でタプタプになるまで満たしてやって
から、ずるりとちんぽ引き抜いた。

「馬鹿にしてる弱い男の精子で子宮をいっぱいにされた気持ちはどうかなぁ」
コイツが時間停止解除後にみんなの前でどんな醜態を晒すか楽しみだ。そう思いながら服を着させていたが、股間から精液を垂れ流す清水の惨めな姿を見ているとまたムラムラしてくる。

…口も使うか。
俺は清水の体を曲げ、顔を腰の位置までよせると、そのまま口内にちんぽを挿入した。
舌に裏筋をこすりつけながら、喉奥まで遠慮なく押し込んでいく。
ちんぽはどんどん大きくなり、清水の喉の奥で反り返っていくのが分かる。
気分が良くなってガンガン喉奥を突いてやる。
「意識があったら苦しいんだろうなぁw」
口とちんぽの隙間から涎があふれ、逆流したのか鼻からも鼻水と同時に吹き出している。
先走りと涎でぐちゃぐちゃにされた口内で、動き回るぬめぬめとした舌の刺激に加え、あまりに無様な状態と、止まっていることで不釣り合いな怒りの表情の惨めさを見ていると支配欲が刺激され、また射精感が高まってくる。

そろそろ限界が近い。
一層奥深くまでちんぽを咥えさせる。
頭の後ろを押さえつけ、喉の最奥に亀頭を差し込む。
「……イク!!」
ピュ　びゅっびゅっ　びゅびゅーびゅーびゅるびゅるびゅる
一度出したとは思えないほどの、すさまじい量の精液が
喉の奥へと流れ込んだ。

これまでの傾向を見るに、止めた時間の中でやった行為は、時間停止解除で一気に襲い掛かっているように見える。
つまり、停止中に大人のおもちゃを使いまくって、気持ちよくさせてやれば、この女は快感で大変なことになるんじゃないだろうか？
そんな事を思った俺は自転車を走らせ、近くのアダルトショップから大量のエログッズを持ってきた。
さっきの刺激で感じたのかクリも乳首も勃起していたのでその部分にローターが当たるようにテープで固定する。
ついでにケツ穴も何か入れとくか。
極太アナルパールをローションまみれにして、ピンクのアナルにぐいぐい押し付け1つまた1つと突っ込んでいく。
さて…この状態で暫く放置しておくか。
飯でも食ったら、保健室でのんびりと寝てこよう。

数時間後。
教室に戻ってきて、清水を観察する。
感度が格段に上がっていたようで、顔は真っ赤に
上気していた。
全身が汗だくで、近づくとむせるかえような女の
匂いが鼻につく。

しかも、床には愛液と潮によって水溜りまでできていた。
「うわぁ、すごw」
この女の思った以上の痴態にニヤける顔が止まらない。
じゃあせっかくだから人が多い所で処女喪失と発情した
姿をお披露目してあげようね。
俺は彼女の全身から手早くおもちゃを外し、パンツと
スカートを履かせて時間停止を解除した。

「!?」
「いたいいいいいいいいいいいい」
大声を上げて股間を押さえる清水。
突然、内股になって情けない叫び声をあげる彼女に、周囲は何事かと驚きの視線を送る。
「いたいよぉおおおお」
まるで小学生のように大口を開け、涙を流す。
良い年をした女性がとても人前で見せて良いとは言えない酷い表情だ。
「いいい　いたいぃいいいい　ひぐっ　うぐううっ
いたいよぉおお」
鼻水を垂らした大号泣に周りも声をかける事すらできずに見守っている。
無理もない、あの最強の女である清水さんが馬鹿面晒して大泣きしているのだ。
状況を把握できる人間なんて一人もいないだろう。

その上
げぇ～～～～～～っぷ
口を開けたまま喉奥に向かって俺が無茶苦茶にチンポを
抜き差ししたせいか、空気を大量に飲んでたらしい。
汚らしいゲップを放つ。
「ぷっ」
「今のゲップ、やばw」
心配そうに様子をうかがっていたクラスメイトから、
たまらず笑い声が上がる。

「～～～～～～～～～～～～～～～～～ッ」
さすがに清水も恥ずかしかったらしく、余裕のない表情に
さらに羞恥の赤みが加わる。
心配する者や笑う者、色んな感情が交錯する異様な空気の中、
彼女に別の変化が訪れる。
「おごっ　ごほっ　ごぼっ　ぶぶぅううう」
口から鼻から俺の精液を吐き出したのだ。

「⁉」
痛みにゆがんだ顔面を皆に晒しつつ、本人も何事だろうと驚いてている。
そして、それに追い打ちをかけるように股間からも精液が噴出し始めた。
「なに　ごでぇええええ⁉
おごおおおろろおおおおぼぼぼぼ　ごぼぉ　ぶぶびゅ」
「えっ　あれ　清水さん…？」
「紗希ちゃん⁉」
「え　何　大丈夫…⁉」

「ひぃ　ひぎいい　いたいいいい」
ジョロジョロジョロジョロ　ジョボボー
とうとう我慢しきれず、おしっこを漏らす清水。
普段の彼女を見ている生徒たちは信じられないという顔をして立ち尽くしている。
「ひぃいいん　みないでぇ　みないでぇええぇ」
情けない声を上げながら涙と涎を垂らしいやいやと頭を振る姿は幼い子供のようで
彼女も見た目と釣り合っておらず見ているこちらが恥ずかしくなってしまう。
さらに、彼女の様子が徐々に変化してきた。
「あひ♡　ああっ♡　ああん♡」
艶っぽい声を上げて顔を赤らめ内股でもじもじとしながら震えだしたのだ。
「あっ♡あっ♡あっ♡　あひ♡あっ♡　ああっ♡
あっ♡　あっ♡　ああん♡」
股間に手を添えて腰をかくかくと振りながら愛液を撒き散らす。
喘ぎ声もどんどん下品な物になっていく。

「おおん　おほぉおおお　おほぉ　おっ　おっ　おしり
壊れるぅ」
吼えるような喘ぎに半ば白目を剥いて舌を垂らし、ますます
激しく腰を振る。
「乳首　クリも　いや　何
気持ち良すぎて　おっ　おおっ　あっ　あひぃいいい」
「ひぎゃあ　あああ　おほおおお　おほ　おほっ
おおおおぉぉぉおおお！」
最後には絶叫しながらイキ顔を晒し、その場に倒れこんだ。
「ヤバくない？」
「……誰か先生呼んできて！」
教室内は大騒ぎになり、周りの教室からも人が集まってきた。
何人かは動画や画像を撮っていたみたいだし、今日中には
学校中に彼女の痴態が知れ渡ることになるだろう。

第六章

暴力女 大敗北

それから一日、学校は清水の話題で持ちきりだった。
「清水さん　すごかったね」
「ね　具合悪いらしいけど　何の病気なのかな」
「何か悪い人から薬買って、それでエッチなことしてるせいっていう噂あるんだけど」
「ええ!?」
「…でも…確かに　普通じゃなかったもんね」
「…うん」

噂の出どころは俺なんだけど、彼女の信望が揺らいできた今、
清水を庇う者より、彼女の痴態を笑うものの方が増えてきた。
最高の気分だ。

でもこんなものじゃ足りない。
あの女は俺の、人としての尊厳を奪ったのだ。
完全に壊してやらないと気が済まない。

そんな時、明日の放課後に清水が以前から争っている他校の
やつらに呼び出されているという話が耳に飛び込んできた。

これは絶好の機会だ。
逃す手はない。

アプリの新機能に、『対象の時間を遅くする』というものを
見つけ、使ってみたいと思っていたところだ。
俺は明日、清水をどんな目に合わせてやるか計画を練った。

次の日の放課後。
清水が呼び出されたという公園に向かう。
なるほどガラの悪い奴らが入口をうろうろしていた。
おそらく見張りだろう。
だが俺は時間を止めて難なく公園内に足を踏み入れる。
奥まった場所まで進むと、池近くのちょっとした広場で
清水と男たち…30人はいるだろうか…が、
睨み合っていた。

「今日こそ思い知らせてやる」
「…はぁ　卑怯者　集団じゃないと女一人やれないんだ
クズばっか」
「…ッ　調子に乗りやがって
今日はマジでボコボコにしてやるからな！」
「何回同じ事を繰り返してるんだか…
弱いやつを何人そろえた所で私には勝てないと思うけど？」
「うるせぇ　死ね！」

言うが早いか男たちが清水に襲い掛かる。

…が、
それに対し、清水は顎(あご)、みぞおち、股間…
的確に急所を攻撃していく。
最小限の動きで複数人を捌き、瞬(またた)く間に地面に
男たちが転がっていく。

その圧倒的強さを見て、まだ攻撃を受けていない
男たちからも、みるみるうちに戦意が失われていく
のを感じる。

「うわぁ　清水さん　酷いことしてるねぇ」
「お前⁉　こんな所に何しに来た！」
「はぁ？　俺に負けてしょんべん垂れ流してたくせに、ずいぶん偉そうじゃん」
俺の発言を聞いて、周りの男達がざわつく。
「⁉　違う　あれは……私の体調が悪い時につけ込んでお前が……」
「へぇ　じゃあ、もう一回勝負してよ　ここにいる人たちが証人になってくれると思うしw　昨日は突然漏らしたりして何か可怪しかったけど、今は体調悪く無さそうだしねぇ」
俺は周囲の男たちと、清水の足元に転がる男たちに視線を向けながら、そう告げた。

「まさか、逃げないよねw」
「…ッあったりまえでしょ…!」
怒りと羞恥に顔を歪ませながら俺に向かって大きく踏み込んできた。
俺はあらかじめ用意しておいたアプリの新機能を起動する。

俺以外の人間の時間の流れを遅くする機能。
清水はその身体能力を生かし、本来ならものすごい速さで
俺のすぐ側…
攻撃範囲内に距離を詰めてきているのだろうが、その機能の
おかげで余裕で避けることができた。
「⁉　速い…！」
清水をはじめギャラリーの男たちが驚嘆しているのが
見て取れる。

俺はそのまま いとも簡単に清水の後ろをとると、スカートを捲り、
露になったでかケツを思いっきりぶっ叩いた。
俗に言う、小さい子が悪いことをして叱られるときにやられる
≪お尻ぺんぺん≫状態だ。
「やめろ……！」
逃げようともがく清水がうざったいので、清水の体のみ時間を
完全に停止させ固める。
バチィン、と大きな音を立ててケツを叩くたびに、清水から
艶めかしい声があがる。
「くっ！」「んぐっ！」「ぎっ！」

ギャラリーも、最強の女として畏れていた清水の痴態に
目が離せない様子だ。
折角だからサービスしてやらないとな。
ショーツを取り去ると、ほんのりと赤くなったケツと
桜色のマンコが白昼に晒される。
「おおー！」
「丸出し！」
「いいぞー！」
知能の低いガヤが飛び交う。
「やめろおおおおおお！」
それが羞恥を余計に煽るのか、耐えられない清水。
だが、指先一つ動かせない。

「やめて欲しかったら逃げればいいじゃん
自慢の馬鹿力でさw」
「くそっ　くそお!!」
もがいてるつもりで表情だけを変える清水が
憐れで最高に笑える。

「ほら、ほら！」
煽りながらケツをバンバン叩く。
「あっ！」「ああっ！」「ひあっ！」
すると、清水から嬌声が上がりだした。
もしかして、これまで停止した時間の中で快感と共に
痛みを与え続けたせいで、こいつは痛みで感じるように
なってしまっているのか…？

「おいおい　ケツ叩かれてびちょびちょに濡らしてるじゃん
清水さん変態すぎるでしょｗ」
ほら、とギャラリーに向けてマンコを見せつける。
「うおぉマジだｗ」
「やばぁｗ」
「こっちはどうかなぁ？」

上半身を裸に剥く。
乳輪の外側から思いっきり押し潰す。
「いたぁ　やめ　いたいぃい」
「ええ？　でも乳首、乳輪の中で大きくなってきたよ
ほら　出てきたしｗ」
陥没していた乳首がむくむくと成長して顔を出す。
「んっ　んっ　やめ」
乳首の全てが露出する。
「あれ？前よりちょっと大きくなってない？
たくさんの人に見られて感じてるのかな？」
「クソが　適当なこと言わないで…ひぐうっ!!」
「生意気な口きくとこうだよ」

そう言うと俺は彼女の正面にまわり、体を掴んで
起き上がらせると、思いっきり股間を蹴りあげた。
「うぎぃいいひぃいいい」
躱すこともできず、弱い部分に革靴でモロに攻撃を
食らった清水は、バランスを崩して泡を噴きながら
地面に突っ伏す。

俺はそんな彼女から残った衣服も引っ剥がし、正真正銘生まれたままの姿にしてやった。
「無様だね　あの清水さんが」
ケツ、股間、乳首…性感帯を攻撃されて息も絶え絶えといった様子の清水。
「どう?負けを認める?」
「…ッ」
意識を失う寸前、朦朧とした虚ろな表情で彼女は
「…あ…あ　私の　負け…だから　もう　やめて」
と敗北を宣言した。
最高の気分だ。

だがまだだ、まだ許すわけにはいかない。
「そう、じゃあ謝罪ってことで、俺のチンポにキスしてよｗ」
言うが早いか俺はバキバキに勃起したちんぽをズボンから
取り出した。
その提案にギャラリーがますます色めき立つ。
「マジかよｗｗｗ」
「こいつも変態じゃんｗ」
「いや、でも見てー」
「やれやれー」
「…っ　だれが」
さっきまで焦点が合わなかった目が、絶対にやるものかという
強い意志によって光を取り戻す。
清水さんはそうじゃなくちゃねｗ
でも…

【時間停止】
時間を止めて清水の口を絞るように握り、
ひょっとこ顔にする。
それを俺のチンポに思いっ切り押し付ける。
【時間停止解除】
「!?　んぐううう～!?」
「うわｗ
すっごい吸い付きｗキスで良かったのにｗｗｗ
よっぽど俺の事が怖かったのかなぁｗ」

「やべえだろあの女の顔w」
「動画撮ってネットに上げようぜw」
「もっと人呼んだ方がよくねw」
「…ッ　ぐッ」
「よくできましたw
じゃあ次はおちんちん挿れてぇ～って
おねだりポーズをとってもらおうかなぁ」
「誰がそんな事…!」

【時間停止】
【時間停止解除】
「⁉　え　何で　私　こんな……！」
自分でマンコとケツ穴がよく見えるポーズをとり静止している清水。
「うおぉー丸見え」
「えっろ！」
「じゃあ後はこの女好きにしてもらって大丈夫だから」
「⁉　お前何言って……！」
「今までちょっと喧嘩が強いからってイキってごめんなさいって土下座したら許してあげるけど？」
「……っ」
それだけはできないのか、俯いて言葉を詰まらせる清水。
「マジかよ……！」
「俺やりてぇ」
「俺も……！」
そんな清水の体に群がる男たち。
「やめろぉおおおお！」

「よし…じゃあ、まずは俺から…」
服を脱ぎ準備万端の男が彼女に近づく。
その時だった。
清水は素早く起き上がり、男から距離を取ろうとする。
まだあんな気力が残っていたのか。
あの女のタフさは本当に驚きだ。
このまま逃がすのも面倒なので、俺はアプリをいじると清水の動きを遅くする。
「なっ!?　体が…」
突然身体が思うように動かなくなった彼女に男のパンチが炸裂する。
「う…っぐう」
腹を殴られ、痛みで目を見開く清水。

男はそんな彼女を組み伏せると、抵抗できないよう
押さえつけると、いきり立ったちんぽを突き立てた。
「ひいっ！」
無理矢理の挿入に悲痛な声をあげる清水。
だが男はそんなことお構いなしにピストンを開始する。
「いっっ……！　ぎぃっ……やめっ　く……うぎっ！
ひいっ　くう……いたぁ　ぐえっ！」
男と地面に挟まれた状態で犯され、苦悶の声をあげるが
男の動きは激しさを増すばかりである。

男はさらに深く挿入できるよう体を動かす。
それはいわゆる種付けプレスの体勢だった。
全力で覆いかぶされらて身動きできない彼女の体が
容赦なく蹂躙される。

えぐるように、奥までちんぽを突きこむと、男は清水に
顔を近づけて叫ぶ。
「オマエには右腕折られたことがあったからなあ！
その分、たっぷり中出ししてやるぜ！」
「やめろおおおおっ！」
びゅくっびゅくっびゅくびゅくびゅくっ！
その悲鳴も虚しく、男は膣内にたっぷりと射精した。

「ふう…はあ…　あの清水に中出しできるなんて最高だぜ」
男が射精を終え、彼女から離れると、今度は別の男が清水に近づいていった。
痛みを我慢し、立ち上がって逃げようとする彼女に次の男の足払いがきまる。
「おい…なに逃げようとしてんだよ。前、俺に『逃げるなんてクソダセェ』って言ったオマエがよ！」

男は這ってでも逃げようとしている清水に、後ろから
強引にちんぽを挿入する。
「いっ……ぎぃ……ッ！」
前の男に無理やりかき回された膣内がまだ痛むのだろう。
苦しそうな表情で行為に耐える清水。
「ひぃっ……いっ……たっ……　ぎいっ……！　ああっ！
くうっ……　いつっ……ぎあっ　ぐあっ……　ひぐうっ！」
あまりに激しい陵辱に清水の顔が歪む。

だが以前やられた恨みもあってか、男はその行為を
止める素振りなど微塵もない。
決して逃さないよう、片手で清水の腰を抱え込み、
えぐり込むようにちんぽを出し入れする。
「ぐうっ…くうっ…やめろぉ…ぎうっ」
耐えるのに必死な清水の声が周囲に響く。

そして、男は勢いをつけるとひときわ強く彼女に
腰を叩きつけた。

「ひいっ……いやあっ！　またっ……！」

清水の反応で、皆が察する。
男はイき、彼女の中に精液をブチ撒けたのだ。

「あ……ああ……ああ……」

戦闘のダメージと二度の乱暴な行為で、清水はもう
立ち上がることもできなくなっていた。
そんな彼女に残った男たちが殺到する。

そこからはもう酷いの一言だった。
マンコも尻も胸も口も…汚らしい男たちから、
ただただ性欲のはけ口に使われた。

手足の時間を停止してやったので逃げることはできない。
穴という穴に出され、全身粘液まみれにされ、男たちに
揺さぶられ続ける。

そんな清水の精液まみれでどろどろの口が何か言いたそうに
もごもごと動いている。
「ん？　どうしたの清水さん　何か言いたいことがあるの？」
「ケンカが…強いからって　ゴボッ　イ…イキって
ごめんなさい」
喉奥や鼻から精液を撒き散らしながら謝罪する。
「ギャハハハハ！謝ってる！」
「このままじゃ妊娠しちゃうもんなぁ」
「もうしてるんじゃねｗ」
「えぇー　俺まだパパにはなりたくねーんだけどｗ」
「誰の子供か分かんねーだろこれなら」
「おれケツにしか出してねーから俺じゃねーぞ」
「お前変態じゃねーかｗｗｗ」

必死で謝った清水を尻目に男たちはそれを無視して
犯し続ける。
俺もそれを止めない。
「いや　いやぁ　謝ったじゃない　なんでぇ」
「俺が謝ったとき、清水さんってどうしたか覚えてる？」
俺の言葉を聞いた途端目を見開いて固まる清水。
「そういう事　こいつらが飽きるまで付き合ってやってね
どんどん人が増えてるから、いつ終わるか分からないけど」

「ひっ　いやぁああ…んぐ」
「うるせぁなぁ」
清水の悲鳴は口に突っ込まれたチンポによって
かき消された。

これは本当にいつ終わるかわからないな。
「じゃあ、俺はこれで」
そう言うと俺は、公園の出口へ向かって歩きだした。
途中、男子学生の集団とすれ違う。
俺とは逆の…清水がいる方向に足早に駆けていく。
おそらく彼らもあの女に借りを返しにきた連中だろう。
因果応報。
そんな言葉を思いながら、俺は公園を離れた。

暫くして様子を見に公園へ戻る。
そこには…
穴という穴に枯れ枝や空き缶、たばこなどのゴミを突っ込まれ、
その隙間から汚らしい黄ばんだ粘度の高い精液を噴出しながら
白目を剥いて気を失っている清水が裸で転がされていた。
体中に痣があるところを見ると、これまで散々痛めつけてきた
やつらから仕返しをされたようだ。

「こんなことまでされて生きてるなんてさすがだなぁ
体、頑丈だよねぇw」
俺の言葉は聞こえてないようで、返事の代わりに尿道から
ちょろちょろと小便を垂れ流す。
ひっくり返って垂らした小便は、清水自身の体をさらに
汚していったのだった。

第七章

プールサイド 肉体改造

因縁の相手に大敗北を喫したという情報はあっという間に
周囲に知れ渡った。
その様子を収めた動画や画像も出回り、校内でも清水は
腫物を扱うような雰囲気で接されていた。

心配する者もいれば馬鹿にする者もいる。
そのどちらもが彼女を追い詰めているようで、見てわかる
ほどに清水はピリピリとしていた。
険しい顔でぶつぶつと独り言を言う清水に、誰も近づけない。

「あいつが邪魔しなければ……あんなことには……」

うわぁ、まだ懲りてないんだ。
恐ろしいなぁw
じゃあもうちょっとお仕置きしてやるか。

今からの授業は…体育でプールか。
丁度いい、さらに恥をかかせてやろう。
女子のプールの授業が始まり、準備運動が開始される。
女子たちの体が体操で揺れる様は見ていて飽きないが、
今は目的があるので我慢だ。

【時間停止】
プールサイドで、だるそうに準備体操をする清水。
俺はあらかじめ用意しておいた道具の入った鞄を
更衣室に取りに行くと、それを手に彼女に近づく。

そして、準備のために水着を脱がせる。
何度も同じようなシーンを見ている俺だが、やはりみんなが水着を着ている中で、ひとり素っ裸で棒立ちしているコイツを見るとバカっぽくて笑ってしまう。

そんな清水の側で鞄からアダルトグッズを取り出す。
マンコ、乳首にバイブやローターを固定しスイッチをいれる。
ケツににもアナルパールを差し込み、股間のバイブに当たる
ようにして腸内に刺激がいくようにセッティングした。
それだけではなく、今回は脇や股間に発毛剤を塗りたくる。

上手く行けば、こいつは脇や股間から毛をボーボーに生やして
プールサイドで晒し者になるはずだ。
そんなコイツの惨めな姿を想像し、発毛剤を塗りたくる手にも
熱がはいる。

そして、俺がそんなことをしている間にも、清水の股間からは
大量の愛液が流れ出はじめていた。

コイツ、本当に感じやすくなってるなw

さて。
棒立ちで間抜けに愛液を垂れ流す清水は見ていて面白いが
発毛剤の効果がでるには、まだまだ時間がかかる。
折角なので、止まった時間の中でやってみたかったことでも
やりまくって時間を潰すか。

とりあえず、
プールサイドで目についた、クラスのかわいい子たちの
身体を触ってみたりする。
それから、セクハラ教師を職員室で全裸にしてやったり、
後輩にパワハラをする運動部の先輩を蹴り飛ばしたり、
ムカつく同級生の家にお邪魔して最新ゲーム機を拝借し
百本近いゲームをトロコンまで遊び尽くしたりした。

あれから、どれくらいの時間が経っただろうか。
時計が正確に動いていないので、よくわからないが
時間を止めてからかなりの日数が経過したはずだ。
俺は本来の目的であった清水の元に戻り、水着を着せて
時間停止を解除する。

「ひぃあああああ！あっ♥　あっ♥　あっ♥」
「⁉」
「何⁉」
「清水さん⁉」
急に叫び声をあげた清水に皆の視線が集中する。
「おっ♥おっ♥おっ♥おほっ♥おっ♥おっ♥」
性感帯を玩具でめちゃくちゃに弄られた快感に翻弄され、
直立の体勢で目を見開いたまま、下品な喘ぎ声を上げる清水。
見ていると、乳首とクリがガチガチに勃起し、どんどん
大きくなっていく。
大きさは以前の3倍ほどになっただろうか。
遠くから見ても布を押し上げ異質な存在感を放っている。
脇や腕、足、股間部分の毛が生い茂り、股間部分は肥大した
クリトリスと生い茂った陰毛で水着が盛り上がり、見た目の
汚らしさがさらに上がっている。

「あひぃいいいぃぃぃい♥」
ひと際大きな悲鳴を上げると、潮を吹き、その場にへたり込む。
内股の格好でよだれや液まみれ…
汚らしい顔と体を晒し、しゃがみ込む清水には、みんなから
これまでの凛々しい彼女の印象を全て消し去るだけの力が
あったようだ。
周りから見れば急に漏らして錯乱したようにしか見えない
だろうしｗ
これまで清水に同情的だった女生徒もその様子にドン引き
しているようだ。
「…っ」
嫌悪感を浮かべ、冷たい目線を彼女に送るクラスメイトたち。
最高だ。

第八章

わからせ　謝罪要求

放課後。
清水の方から俺を呼び出してきたので、旧校舎裏の人気のない広場に向かう。
「私と1対1で勝負しろ　私が勝ったらそれを拡散してもらう」
「…良いけど　勝てる見込みはあるわけ？」
「今までは、私の体調不良の時や、別のやっと喧嘩をして体力が削られた後に仕掛けてきたり…と卑怯な方法で勝っただけ！
万全の状態なら、あんたなんかに負けるわけがない」
「…はぁ、良いけどw」
負けを認めたくなくて、無い知能を絞り出して理由をつけたってわけだ。
まぁ、卑怯な手段を使ってるってのは当たってるんだけどね。
時間停止っていうチート能力だけど。

「死ね！」
言うが早いか俺の顔面目掛けてものすごい速さ、
重さの拳を突き出してくる。
本当に物騒な女だなぁ。
あらかじめアプリで動きを遅くしておかなかったら、
冗談抜きに殺されていたかもしれない。
そんな訳で、彼女の渾身の拳を難なく避けると
腹に一発入れてやった。
「うぶっ」
体がくの時に曲がり、下りてきた顔に一発入れる。
「ぶごっ」
何とか堪えてまた殴りかかろうと体勢を整える
この女の股間を思いっきり下から蹴り飛ばす。
「いぎっ」
情けない声を上げて前かがみになる清水。

「ちゃんと当ててくれないと…
俺が女の子虐めてるみたいになってるじゃんw」
ここぞとばかりに煽ると、怒りで我を忘れ、大ぶりの
パンチを打ってきた。
あーあ、だめだこいつw
「何それ　子供じゃないんだから、ぶんぶん腕を
振られてもねぇw
攻撃の当て方、教えてあげようか？w」
俺はその拳を軽く避け、素早く後ろに回りこんで
彼女のケツを蹴っ飛ばす。

「嘘だろ…何で　勝てないの……？」
「単純に弱いからでしょ」
こんなに頭に血が登って冷静さを欠いた清水なら、
俺の力でも簡単にねじ伏せられる。

「じゃあ、まあ…
これまで散々やられた分、体で返してもらおうかな
あんまり人を舐めてるとどんな目に逢うか、きっちり
教えてあげるよ」

「いや　いやぁあ」

これまでの清水からは考えられないような弱々しい
声を上げながら頭を振って逃げようとする。
そんな清水の手を取り、無理矢理人気のない旧校舎の
男子トイレに連れ込む。

トイレに入ると、俺は清水を裸に剥く。
当然激しく抵抗されたが、その動きもこちらから見れば
スローモーション。
抵抗虚しく、清水はいとも簡単に一糸まとわぬ姿になった。
ブラジャーとショーツの下に隠されていた、どす黒く大きな
乳輪と子供ちんちんサイズのクリトリスが露わになる。
「うわぁ…　清水さんの体って　なんていうか　汚いねぇ」
俺がやったにも関わらずしらばっくれて小ばかにしてやると、
顔を真っ赤にして睨みつけてくる。

「見て、この裸の画像…
これが普通の女の子の体なんだけど」
汚体にされる前の清水の裸画像、頭の部分をトリミングしてあるものを見せる。
「…だから何よ」

「それに比べてさぁ…」
心底あきれたという声を出しながら清水の体を撮影して、その画像を清水の眼前に突きつける。
「ほら見て清水さんの乳輪　汚すぎない？
こんな薄汚れてくすんだ胸の同級生いないよ？」
「ぐっ……！」

「でさぁ、マンコは真っ黒でしょ？
クリトリスも、もうこれチンポじゃんｗ
清水さん男よりに強いのが自慢だったっけ？
実は男だったんじゃないの？ｗ」
「～～～～～～～～～～～ッ！」

「ケツ穴も酷いよね～縦に割れて汚く膨らんでて」
さらに悪ふざけで、俺は自分のケツ穴を彼女に見せてやる。
「どう？　この清水さんのブサイクアナルに比べて、男の俺のケツの穴の方がきれいじゃない？ｗｗｗ」
「～～～～～～～～～～～～ッ!!」
最大級の屈辱だったようで、真っ赤になって震えてる清水。

「あーあ、清水さんの汚い体じゃチンポが反応しないよ
頑張って勃たせてもらわないと」
ため息をつきながらズボンをおろして清水に近づく。
「……ってことで、ケツ舐めてw」
「……え？　は……？？？」
「今まで散々いじめられてきてさ……
そのお返しに、何して貰おうかって考えたんだよ
最初は良くある『俺の靴を舐めろ！』みたいなのやろうと
思ったんだけどそんなことされてもつまらないし、全然
気持ち良くないでしょ？」
「それならもっと汚くて屈辱的な方がいいかなってw」
「舐めるわけないでしょ！　バカ！　死ね！　汚い！
やめろ！」
「チンポにキスしたり　色んな男に体中精液出されて
おしっこも漏らした清水さんよりは、俺のケツ穴の方が
まだキレイな気がするけどなぁw」
「死ね死ね死ね死ね死ね死ね！
殺す！　いつか絶対お前を殺してやる!!」
「ふうん　可愛くないなぁ」

俺はつかつかと清水に歩みよると、素早くその背後に
回り、首を絞める体勢にはいる。
「ぐえ　ごえ　ぐっ」
じたじたするも俺を振りほどけない清水。
呼吸ができなくなり、口をパクパク開けて必死で
酸素を求めている。
そんな彼女を締めたまま、地べたに引き下ろす。

準備ができたので時間を停止させる。
俺は彼女の口から、だらしなく伸びた舌を引きずり出し
上を向かせた。
そして、
その舌に向けて尻穴を近づけていく。

清水の伸ばした舌が俺のアナルに触れる。俺はそのまま尻を突き出し、舌を穴の中にねじ込んだ。
ケツを前後左右に振って湿った暖かい舌で中の気持ちいい所を何度も往復させる。
「うわぁ～～～思ったより気持ちいいなぁこれ癖になりそうw」
ムカつく女の舌でケツ掃除をするのは、想像の何倍も爽快だった。

時間停止解除。
「!?　ん　んぶっ」
「あ？　目が覚めた？
首絞めたらすぐに落ちちゃったから勝手にやらせて
もらってるよ
失神って癖になるらしいから気を付けた方がいいん
じゃない？」
「!?　ん　んぶぅううう　おえ　んご」
逃げようとする清水にケツを押し付ける。
「やめてぇ　もう　おねがいいい」
ちんぽも勃ったし、涙声で懇願する清水に気分が
良くなり解放してやることにした。

向き直り、清水の体に触れる。
ビクンッと身体を震わせて動きが止まる。
「い……いや……」
股に手を突っ込みマンコをまさぐると
ぐちょぐちょという卑猥な音が鳴り響く。
「うわ　濡れてるし　え…何？
俺に絞められたり、ケツ舐めさせられて感じた？」
「そんな…なんで……私……」
「マゾなのｗ？」
「そんなことない……！」

「はいはい　じゃあ遠慮はいらないよね」
俺は清水のマンコに雑にちんぽを充てがうと、根元まで一気に貫いた。
「あああ　あっ　あっ」
深く突き入れられ子宮が刺激される。
女の身体を揺すり、さらに奥まで肉棒で突き上げる。
幾度となく乱暴に犯された体は、酷く扱われることで快感を得るようになってしまっていた。
「いや！！駄目　あっ♡」
ちんぽを根元まで挿入し、そしてカリの部分まで引き抜くという動作を激しく繰り返す。
「んんっんっんっんっ♡んンン～～…っ♡　ふぁぁぁ…♡」
意外に清水の喘ぐ声は可愛らしく、俺の興奮を煽る。

途絶えなく淫猥な結合音がトイレ内に響き渡る。
俺が容赦ない突き上げを食らわす度に、清水の乳房が跳ねる。
「ああ……う……だめ……んあああ……あ……あ……いや……ひゃ……ンっ！」
清水は首を振って快感を拒絶しようとするが、
まんこから愛液が噴水のように吹き出る。
クチュリとたっぷりに湿った膣ヒダが、俺のちんぽに
まとわり付き、内部が激しく蠢動する。
「も……♡ もうこれ以上は……♡ お願い……♡
もう……やめ……♡」
イキそうなのだろうが、俺にイカされるのは嫌なようで
必死で耐えている。
その態度が癪に障ったので、腰を掴んで乱暴に奥まで
ちんぽを突き入れてやった。
「んああぁぁぁ～～～っ!? ん～～～～～～っ！」
亀頭に硬い感触が当たる。 子宮口だ。
ぐぼっ……！
俺は容赦なく子宮口を亀頭で貫いてやる。
「ひああああああっ！」
子宮口が亀頭を包み込む。

尿道が子宮内部で射精してやろうとパクパクと開閉する。
「あひ♡あひぃいいいいいいいいい♡」
膣内が痙攣して竿をぐにぐにうねうねと締め付けてくる。
その動きで、清水がイったのが分かった。
俺もそろそろイかせてもらうか。
下からさらに激しく腰を突き上げる。
「ひぃいいん」
ギリギリと悲鳴を上げながら蠢動する清水の
子宮のm中まで犯しつくす。
そして…
限界までちんぽを奥へ突き入れると
びゅぶッ　びゅるるるっ　びゅ～～～～っ
ぴゅっ　ぴゅぴゅっ
子宮に直接、俺の白濁液を大量に流し込んだ。
子宮口と膣がそれを外に逃すまいと奥へ奥へと
ごくごく飲み込む動きをしているのが分かる。

ぬぽん
今まで力でねじ伏せられてきた相手を完全征服した
達成感も相まり、あまりに気持ちいい射精だったので
足ががくがくと震えていた。
息も絶え絶えといった様子の清水に、これまでの
時間停止後の痴態を撮影した動画を見せつけてやる。
「どう?自分の事が客観視できた?
清水さんって弱いし汚いし、ちょと力が強いくらいで
よくこれまで偉そうにしてこれたよね
心を入れ替えた方がいいんじゃない?」
「……ッ!」
この女……
ここまでされてもなお、まだ俺を睨みつけられるのか。
だがその表情は以前に比べると随分弱々しい。
もう一押しか。

【時間停止】
俺は時間を止め、清水を校門前に連れて行く。
校門前には下校中の生徒がちらほら見受けられた。
俺はそこで裸の彼女に鼻フックを施し、首から紐で≪私は負けました≫と書かれたプレートをかける。
私は負けました
その屈辱的な姿に加えて大股開きで、中出しされた汚らしいマンコとアナル、毛の生えた体を見せつけるポーズをとらせた。
【時間停止解除】
「きゃぁああああああああ！」
「何⁉」
「変態‼‼」
「いやぁあああああ」
突如現れた汚らしい変態女に皆驚いて悲鳴を上げる。

「清水さん⁉」
「え、負けたって…」
「誰かにやられてこんなことされたの⁉」
少し落ち着いてきたギャラリーたちが彼女が誰であるかに
気づき、プレートの内容を読んで同情的な視線を送る。
裸を見られる恥辱、最強であった自分が負けたという屈辱で
真っ赤になって震える清水。
だが、涙より先にフックによって開かれた鼻の穴からどろりと
情けない鼻水が流れて滑稽な姿をさらしてしまう。
ここまでやれば心が折れただろうか。
少しでも反省してくれているなら…
もう俺に暴力をふるう気がないのなら許してやってもいいかもな。
「ねぇ　俺を虐めてたの悪かったって思ってる?」
清水に問いかける。
すると彼女は…
私は
負けました

『謝らなかった』　→ED1フォルダへ
『逆ギレしてきた』　→ED2フォルダへ
『素直に謝った』　→ED3フォルダへ

エンディング①

薬漬け快楽堕ち

「何であんたなんかに謝らないといけないのよ
どうせ変な手を使って勝ってるんでしょ!?
絶対いつかぶっ殺してやるから」
「…そう」
まぁ、変な手を使ってるっていうのは合ってるんだけど、
少しはいじめを反省してくれたら良かったのに。
仕方がない…
「反省してくれないようだから、手加減なしで思いっきり
やることにするよ」
時間を止める。
私は
負けました

私は 負け ました
時間停止アプリの別機能を使って清水の意識を覚醒させる。
「…何⁉ 何が起こって 体が…動かない⁉」
「うん 俺 時間が止められるんだよね
だから、もし今後清水さんが頑張って、どれだけ喧嘩が
強くなったとしても、俺には絶対かなわない…ってわけ」
「え？ 何言って…
まさか、そんなことできるはずが…」

そこに取り出した注射器。
「さっき入れてみて思ったんだけどさ清水さんマンコもケツ穴もガバガバのブスすぎて最低だよねこれ以上チンコ入れる気にもなんないから、これで気持ちよくなっといてw」
彼女の眼前に注射器を突き付ける。
「え？　は？　何？まさか…クスリ？」
「そ」
「ヒッ　やめ…！」
「やめない」
暴力団の事務所からくすねてきた薬を彼女の乳首、マンコ、アナルに注入する。
私は負けました
「ひぃ　頭チカチカして　体　熱い　や　こわいいいぃぃいいい」
効果はさっそく現れたようで、焦点の合わない目をしながら涎を垂らし、歯をカチカチと鳴らしながら震えだした。

「折角だからこれもプレゼントするよ」
大人のおもちゃと言われる様々な淫具を取り出す。
「だめ　今そんなの」
「で、今からまた清水さんの意識も時間と一緒に停止させるね」
言いながらマンコにバイブを突っ込む。
「ひあぁ♡」
「期間は…そうだな
1か月くらいにしようかな」
ケツにはアナルパール。
「んおっ♡」
「止まった時間の中で感じた快感は
時間が動き出した時、全部が一気に
くるから」
右乳首をローターで挟み込む。
「あはぁあああ♡」
「前みたいにまた酷い姿をみんなに見てもらえると思うから
楽しみにしておいて」
左乳首にもローターでサンドする。
「んんん♡ああ♡」

「それで　ああ♡　今まで　あんな　あはぁああ♡」
「そうそう　どんなに俺に逆らっても無駄
酷い目に逢うだけだって理解した？」
「やめて　あやまるから　あはぁ♡
あっ♡あ♡　あんなのいやぁあああああ♡」
「もう遅いよ　じゃあね」
そう告げると、彼女の意識を停止させる。
脅すために1ヶ月って言ったけど、そんなに待つのも面倒だ。
適当に数日放置して解除することにしよう。
さてどこで晒し物にしてやったら面白いかなぁ…。
私は
ました

大型ショッピングモールの前に大絶叫が木霊する。
ぎょっとして振り向く人々。
そこにはゴミ箱にケツから突っ込まれて暴れている少女がいた。
ケツが抜けず、ごみ箱から出られないようで足掻いている。
首には
≪動画撮影中≫と書かれたプレートが下げられていた。
周りの人たちは裸の清水に驚きながらも関わりたくないようだ。
あんな迷惑系の対処は店員に任せる…とばかりに、彼女へ軽蔑のまなざしを向けると足早に遠ざかっていく。
「おっ　おっ　おお♡　おほぉぉぉ♡」
下品な喘ぎ声を上げる上に全裸でバタバタと体を揺さぶる女の姿を見せないよう、子連れの家族は慌てて引き返していく。
動画撮影中
事態を収集するべく店員が駆け寄る中、逆に興味本位で彼女に近付いて撮影する人も出てきた。
この店は学校から近いので、うちの制服の生徒たちの姿もちらほら見える。
「あれって…」
「だよね、清水さんだよね」
「やば　何やってんのあの人」
「最近変だなって思ってたけど」
「やっぱ暴力ふるう人ってどこかおかしいんだよ」
「ねー　騙されてたっていうか…本性が分かったって感じだよねー」

彼女から遠巻きに人の輪ができるなか、これまで清水に力で
ねじ伏せられていた不良たちも仲間から連絡を聞きつけ
集まってきたようだ。
「うっわ　だっせｗｗｗ」
「くっさｗｗｗ　ゴミよりこいつの方が臭くねぇ？ｗｗｗ」
「ゴミ箱から出るくらいさっさとやれよｗｗｗ」
ここぞとばかりに清水を馬鹿にする。
やっとゴミ箱から出た彼女は虚ろな顔で地面を這いずる。
「おほぉおお♥　おおおっ♥　おおん♥　おほぉおおおお♥♥」
時間停止中の快感に襲われ、床の上で絶頂する清水。
あまりに汚いイキ顔にゴミで薄汚れた体。
丸出しの股間からジャージャーどばどばと愛液を垂れ流し、
あたり一面にに撒き散らす、衆目環境での絶頂は本当に
無様で惨めったらしいものだった。
そして…
俺に逆らったらどうなるか脳筋の彼女にも理解できたのか、
それともそんな頭まで薬で壊れてしまったのかは知らないが、
この後、二度と清水が俺の前に現れることはなかった。
～END～

エンディング②

花壇埋め無様晒し

「あんたがキモくて弱いのが悪いんじゃない！
逆恨みでこんなことまでして
許さないから！
どんな手を使ってでもボコボコにしてやる!!」
逆切れされてしまった。
残念だ。
私は
負けました
「良いよ、じゃあこっちももう手加減しないから」
時間を止める。

時間停止アプリの別機能を使って清水の意識を覚醒させる。
「…何　何が起こって　体が…動かない⁉」
「うん　俺　時間が止められるんだよね
だから、もし今後清水さんが頑張って、どれだけ喧嘩が
強くなったとしても、俺には絶対かなわない…ってわけ」
「え　冗談でしょ？　そんなことあるわけが…」
「俺の他に何も動かないでしょ　音もしないし」
「え…　嘘　そんな　まさか本当に…！」
「だから今からどんなに清水さんが叫ぼうが人は来ないし、
逃げるために動くことも出来ない」
「俺がここで君を刃物で刺したり、鈍器で殴っても誰も来ない」

「…っ」
静かな空間で、清水が恐怖からつばを飲み込む音が聞こえる。
「しかも、時間停止中に起こった感覚は後でまとめてくる
みたいだから…
経験者だからわかるでしょ？
痛いことをされたら一気にそれが襲ってきちゃう
もしかしたらショック死しちゃうかもね」
「やめて…　お願い　謝るから」
じょろじょろじょろじょろ～～～～
清水は恐怖に耐えきれ無かったようで、情けない顔をして
失禁していた。
「もう遅いよ
でもまぁ俺も別に清水さんを殺したいわけじゃないし
その点は安心して」
「…」
「でも、今までされたことの鬱憤は晴らさせてもらうよ
これまで以上にしっかり犯した後、晒し者にしてあげる」
「いやぁぁああああああ」
「じゃあ意識も停止させるから…
何をするかは時間が流れ出した時のお楽しみだねw」
「ごめんなさい！　あやまるから‼　ごめ…」
時間を停止する。

（え⁉　真っ暗で　息ができない
何⁉　何が起こっているの⁉）

学校の正面入り口前花壇。
下半身を丸出しにして、逆さに突き刺さっているのは
清水だった。
他の植物と同様にプレートが立てられており、そこには
- 2年A組 清水
暴力女
暴力による虐めをし
雑草以下
《2年A組　清水沙希》
暴力女
暴力による虐めをしていた
雑草以下
と書かれている。
偉そうな顔をしている清水の画像も印刷して貼られていた。

（何⁉何なの⁉地面…⁉）
両足をバタつかせて抜け出そうともがく清水。
（口の中　ドロドロしたものが　臭い
にがい　苦しい　息　できない）

（胸 クリ 全部 触られて いやぁ）
（!? 股に何か 入って お尻も
ひぃいいいいいい）
快感も相まってさらに激しく暴れだす。

そこへ登校してきた生徒たちが
尋常ではない事態に気づき、
慌てて助けに駆け寄ろうとする。
だが…

(いひっ　んぎもちいいいぃいぃいぃいいい)
体中を駆け巡る快感になすすべなく潮を吹く清水。
まるで噴水のようなそれに、近付いていた生徒たちが怯み、
一斉に足を止める。
(おほぉおおおおお　おほぉおおおおん)
マンコとケツ穴から潮、精液、愛液、腸液を撒き散らしながら
ぴくぴくと絶頂する清水。
さながら噴水のようだった。
「うわぁ……」
「きったな……」
その姿には助けようとしていた生徒たちもドン引きだ。

しかも
（苦し……息が……）
少ない酸素で苦しい中暴れまわったせいで酸欠を起こす。
（だめ……!!）
ジョ～～～ジョロロロロ
尿が撒き散らされ、清水自身の体をさらに汚していく。

さすがにこうなってしまっては
もう誰も助けに行こうとする者はいない。
仕方ないなぁ。
「だめだよ清水さん
おしっこを直接かけると花が枯れちゃうからね」
あざ笑いながら近づき、花壇から引き抜いてやる。

「ぶはっ　はーっ　はーっ」
せっかく掘り出してやったのに、清水は鼻や口に入った
泥を払い、酸素を吸うのに夢中だ。
「助けてやったんだからお礼くらい言えないわけ？」
声をかけるとようやく俺に気づいたようだ。
「ひぃいいいいいい！」

膀胱と腸内に残っていた尿を恐怖で撒き散らしながら後ずさる。
「もう　しゃからいませんからゆるしてくださしゃいいいいい」
清水はそう言うと、ブス顔で大号泣しながら気を失った。
どうやら心を折ることができたようだ。
これでこの女が今後俺に関わることはないだろう。
～END～

エンディング③

謝罪から交際へ

「悪かった…」
意外にも素直に謝ってきた。
「うん　分かればいいや　もう俺に関わってこないでね
あ　でも最後に　なんで俺だけ虐めてきたの？」
「…」
「何か　気になったっていうか」
「？」
「気が付いたらちょっかいかけてただけっていうか」
この女、あれで好意を持って接していたつもりだったのか。
「ボコられだしてからは…好きになっちゃったっていうか」
「⁉…」
脳味噌筋肉もここまでくると凄いな。
「付き合ってくれないか…　私　お前のことが…」
だが、悪い気はしない。
「んーまぁ　じゃあ試しに」
こうして俺たちは付き合うことになった。
私は
負けました

そして…
それから数日後。

「こんな格好……恥ずかしいんだけど」
「清水はすぐお漏らしするし　頭悪いし　子供からやり直した方がいいんだよ」
ここは人のいない夜の公園。
清水は髪をリボンのついたゴムで短いツインテールに結ばれ、
小さな子が着るような服を身に纏い、おむつを履かされていた。

「こんな格好見られたら人生終わっちゃうねぇw
警察に突き出されちゃうかもしれないしw」
「うう…もう　やめよ…」
「あ　あっちから人の声が！」
「!!」
「と思ったら気のせいだったw　ごめん」
「あ　あ　あああああ」
しょろしょろしょろしょろ〜〜〜
おむつの中から水音が聞こえる。
清水はびっくりして失禁していたのだ。
俺に散々いたぶられ続けた結果、コイツは完全に腑抜けて
しまった上に、時間停止調教によって下が緩くなっていた。
「ほら　また漏らしてるし」
「ううっ」

羞恥で半泣きになっている清水を公園の茂みに連れ込むと、
チンポを眼前に突きつける。
「♥♥♥　良い匂い……♥　早く　早く　しゃぶらせて……！」
それだけで涎を垂らしながらうっとりと鼻を鳴らす清水。
「清水はチンポが大好きだなぁ」
「大好き♥　お願い♥　我慢できない♥♥♥」
そう言いながら、ふごふごと鼻を鳴らしてチンポを嗅ぐ。
そこには最強だった頃の面影など微塵も残っておらず
鼻を広げてチンポをおねだりしている、ただの雌豚が
１匹いるだけだった。

「ぶっさいくな顔して必死でちんぽ嗅いで…仕方ないなぁ
どうぞ　舐めて良いよ」
「♥♥♥」
「ありがとうございましゅ　ちゅぽ　んむっ
どんなにちからが　むちゅ　ちゅむっ　つよくてもぉ、
おちんぽ様にはぁ　あはぁ♥　かないませんっ♥」
チンポへバキューム状態で吸い付き、舐めしごきながら、
俺のチンポへの服従を述べる清水。
征服感で満たされ、気分が上がる。

「従順な良い子の清水にご褒美を上げるよ」
言いながらおむつを外す。
アナルには極太アナルパールがねじ込まれていて
マンコはぐちょぐちょだ。

遠慮なくちんぽを突き入れる。
『ありがとうございましゅう♥♥♥』
チンポを入れられ舌っ足らずに賛辞を述べる。
「あ、あんっ……あ、あふぁっ……あ、な、何かくるうっ……！
あ、あっ、あんっ……あたしもう……ッ……だめぇ……
くふぅ！はぁ、はぁ、もうっ、もうっ、あううぅん！
あぁん！あひゃっ……あぁんっ……」
「かっ、かひぃ！　りゃめっ、あひっ、んひぃ！
んうううう～～～っ！　あうん、あうううん！
ひぃいっ……はひっはひっ……すごい……♥」
深く突き入れられ子宮が刺激される。
奥まで一気に貫き子宮口まで到達させる。
今日はこっちを壊してやろう。
「ああっ　あっ　あうぅんあはぁ、あうぅぅん！　あっ！
あ　あんっ　あ　あふぁっ　ああっ　あんッ　だめぇ！」
身体を揺すり、さらに奥まで肉棒で突き上げると
ぐぶっ…と何かを貫いたような感触があった。
「ひぎいいぃいいああああああ！」

亀頭が子宮口を突破する。
「ダメ　ひぎぃい　奥　こわいぃい　来ちゃう
何か　ひぃいいい」
だがまだだ、もっと奥まで……！
「んぎ　んがぁあああああああ」
俺が容赦ない突き上げを食らわす度に、不似合いな
女児向けの服から覗く清水の大きな胸が揺れる。
奥へ奥へと進むと肉のきしむ感覚がちんぽにまとわりつく。
「ひぃぎいい　あがあ　むりぃ　むりぃいいい」
内部が激しく蠢動する。
まんこから愛液が吹き出る。
限界まで突き入れ、亀頭の先に子宮口をひっかけ捩じり
ながらゆっくりと奥から外へとちんぽを引き抜く。

ずるり
「ひぎぃあああああああああああぁぁぁぁぁあああ！」
亀頭にまとわりついていた子宮が外界に連れ出される。
「はは　やったw」
「…ッ　ん…ッ」
ぴくぴくと体を震わせ、その場に倒れこむ清水。

「んあぁぁぁぁ～～～っ!?　ん～～～～～～～～っ!?」
だが、それで終わりではない。
俺は飛び出た子宮に手を添え、その口に再び挿入した。
「おおおぁおおおおおお　んごおああおおおおおおお」
喘ぎというよりも咆哮を上げている清水を気遣うことなく握った子宮をオナホ代わりにちんぽをこしこしごく。
「んほぉおおおおおおお」
彼女は乱れに乱れた後、体を殊更激しく震わせ、泡を吹き白目を剥きながら絶頂した。
子宮が絡みつき俺の腰に甘い痺れが走る。

「出すぞ……出す……くっ!!」
大量の射精が清水のまんこを満たし、そして子宮の内部へと
溢れていく。
はみ出た子宮を奥に向かってしごいて精液を奥に送り込む。
「あひっ　あへぇええ」
幸せそうに気を失う彼女が少しかわいく見えてきたので
ちゃんと付き合ってやっても良いかもしれない。
～END～

委員会
時間停止でわからせ

時間停止中
start

第一章

教室で時間停止

第二章

保健室 自慰観察

第三章

旧校舎裏 決闘

第四章

雑魚にボコらせる

第五章

教室で衆目羞恥

第六章

暴力女 大敗北

第七章

プールサイド 肉体改造

1
2
3

第八章

わからせ 謝罪要求

私は
負けました

私は
負けました

エンディング①

薬漬け快楽堕ち

私は
負けました

私は
負けました

私は
負け ました

私は
負け
ました

私は
ました

動画撮影中

動画撮影中

エンディング②

花壇埋め無様晒し

私は
負けました

- 2年A組 清水 沙希 -
暴力女
暴力たよる虐めをしていた
雑草以下

2年A組
暴
暴力

ー２年A組
暴
暴力た

2年A組
暴力に

2年A組
暴
暴力た

－２年A組
暴
暴力に

－２年A組
暴
暴力

エンディング③

謝罪から交際へ

私は
負けました

委員会
時間停止でわからせ

時間停止中
start

第一章

教室で時間停止

第二章

保健室 自慰観察

第三章

旧校舎裏 決闘

第四章

雑魚にボコらせる

第五章

教室で衆目羞恥

第六章

暴力女 大敗北

第七章

プールサイド 肉体改造

1
2
3

第八章

わからせ　謝罪要求

私は
負けました

私は
負けました

エンディング①

薬漬け快楽堕ち

私は
負けました

私は
負けました

私は
負けました

私は
負けました

私は
ました

動画撮影中

動画撮影中

エンディング②

花壇埋め無様晒し

私は
負けました

2年A組
暴力

－２年A組
暴

2年A組
暴力に

－２年A組
暴
暴力た

－２年A組
暴
暴力に

エンディング③

謝罪から交際へ

私は
負けました